

2302

古今稂魁考
一

古今妖魅考序



師木嶋乃大御代尔。中子止云布物乎。
渡志參来尔祁留乎。其甚異加留行尔。
氏。直久正伎。神乃御國乃風儀尔波。似
氏志毛附加努。妖偽事尔奈母有祁礼
波。愛尊武人毛。受依留人毛。其枉言尔
相口會氏。狡久狂礼惑波奴波無志天。
世乃為尔毛人乃為尔毛。其惡加流事

奈亡轉有苗乎。天地止。日月止。共尔。窮
美無伎。大御代乃内尔波。唯暫時乃事
尔許曾有礼。人乃世波。百繼八十繼止
經行氏。遙祁久遠伎事尔。奈母有祁礼
波。慨美歎加努波。無久奈母有祁礼。杼
其將功驗。奈伎物思尔天。何乃代尔加。
此禍事乎。却以給波武。何乃時尔加。此
惡風乎。直志給波武止。神乃所為乃。甚

願波志久氏。奈亡有祁流乎。吾師大人
伊。神乃御手代止。却以退久止。雄偉志
久健備氏。和乃漢乃。佛乃書尔有苗實
徵乎得。歷世尔有都留事跡乎。探索米
氏。伊那醜目汚穢伎。佛祖與利始氏。相
交許礼。苗僧徒麻傳。現世乃間許曾。人
乃狀波變布麻。自祁礼。魂乃行方波。五
月蠅奈須。妖魅止成乍亡。冥府尔罰米

良延氏有留事乎。熟尔見。熟志。論定氏。
世尔幸倍牟止。著述波佐礼祁留奈毛。
此書奈利祁留。如此有尊伎義志書乎。
徒尔文庫乃内尔。隱米置倍志夜波止。
氏。鐵胤主尔相謀利。印本止為志氏。萬
代尔後世尔。傳倍弘牟留尔奈毛。時波
天保二年止云牟乃春。如此云波。越後
國蒲原郡新津郷人。桂譽正

○此書の成る由ありし

おまじれ古今妖魅考といふ書はも。林羅山先生の説トキトに依りて。我父れ。世り
化物バウモノと云ふものなる。其本縁を考覈められし書あり。いて其大意を云ふ
述てむ。化物とは即麻我毛能マガモノの石根木株イハネキネ。草カキハ片葉アラミナワ。青水沫ヨリツも憑託ヨリツきて。
言語モノイハしめ。謂イハある非情の物モノも起ち活動ハタラうあむ。麻我神マガミといふを本よりみて。
人の靈魂タマれ人より脱きて。異ヘテ所行レワザをれし。或は狐狸の類に在る態を。みれ
まててある言ふあり。妖魅の二字は。其小當まる漢字カラモジれる哉。音コエも讀べき
為ムネし專ムネとハ此字用らる。ちまど古くよき。在物惡鬼。妖怪マカなぞ。猶ナほくさぐさ書來
たきば強シビて拘カバる係事ケイジあり。孰イジをも書れり。ちて麻我神マガミあり。麻我毛能マガモノと。何
ある義コトぞと云ふ。世の治れる時を乱さむとし。人れ福を見てハ禍マガミせれし。万小
直キラれるを惡キラひて。在マカる係ケイを好むが故ユ。禍神マガミとも在物マカモノと云ふ。毛能モノとは。鬼
神。人種。万物。何ナニも廣ヒロくいふ稱ナあり。抑オスまのま賀カもの。出來し始ハジメを稽カゆる。

久方此天初神世也。伊邪那岐。伊邪那美二柱大神。男女共御事を始め。御子生
みひるふ。女神伊邪那美大神。はちみふ事ありて。夜見国に往坐る哉。男神伊
邪那岐大神。その御後を追ひて。其国小到りみへ。然る小此夜見国をも根
国下於国など云ひて。醜めき穢き国れるが上。伊邪那美大神。きて其戸喰
ちみひて。歸るふと能はず。甚も忌々き御有状を。見畏み逃歸り
みひて後。其穢惡を祓ひみむとて。日向の橘に小戸ちみ水戸に到坐して。
禊祓ひみふと。其大御身小著る物等を脱棄みひし。長道磐神。煩神。閼菟神。
奥疎神。邊疎神などいふ神れ。是を世も人も惡事なり神の始あり
り。斯て千万歳を過來し程。其惡神ども多く成ぬるが上。中御世も蕃国
よ。佛ちみ物を献れる時。副來つる妖魅も多かりしと聞ゆる。此方より其
道に率れる者は。やうて其鬼と成り。漸くみふえ行て。世はうくむき事れも
多く成り。然る小此妖魅ちみ物。現人の目小見えぬ。幽冥に物みし有まば。

其情狀を察する事。いと難き態ある故。よく考明せるもの有らざれば。世の庸
人の辨へ知らざて。思ひ惑ふも尤なる事。然しも枉まけ。漫するより。
古に神の御事は。鹿略にあり行。神等は坐まさぬこと。隠るひまし。高天原
に悉く。彼佛とて蕃神をし。上なく貴た物とめて敬ひ。世人の心拙く女々々ぞ
成れ。是は枉物。相率り相口會て。最も悲く。慨き事。極み
ありけり。然る小時や來みむ。天文を稱し御世。東照神祖命生れ出み。天正
慶長など云し御世頃。專と天皇に御為。天下を鎮めみ御業。勞うせ
み。服をぬ人をば。御仁惠を以て事向めみ。暴る者等を。武士。御威
稜を振ひて。征伐めみ。將るに皇典等を召問して。次々古の御式。復し。
廢れ。神事をも興し。天の下よく治。目出。御代とは成。り。
さ。御舉。輔佐申され。臣。最。中。林羅山先生ハも。
文道の事。仕奉ら。程。神社考。書。著。して。神社の縁起を述べ。彼佛

法の異端ある由を論ひ。其中にも。天狗ちふ妖魅の。本因を考明されあるハ。
古今小比ねく。傑する説小あも有る。殊小此ふみ。早くより板本と成て。世
小弘まき。高たも卑きも悉く。此説は信奉るべくあり。最も愛
ふた事なり。然る小此書はしも。王公大人に聞えむとて。其文舛記さ
されむ。庶人の心納きは。悟得てや有む。かく學の道は開けつる御代小し。毛
彼左道説小誑され。或も君上の命令小戻り。あるは家の産業を棄て。各もく
先祖の大本する。神祇をし。麁略されし奉承者れ。世に多く有めるハ。甚く
うはしく。傍いふ事なり。愛小我父はも。早くよ。此先生の此説をし。漢く
信ひみへる。餘り。いづで此を。天下の大凡人に容易く。読得べく書成し。は
その徴と。あふべき事等哉。手近き軍物語を始め。數は書等より抄出して。參
考へ。詳く解悟してむと。年毎に心留置れ。甚多小成ぬるを。此文政の
五年と云る年小。其を大抵小記し序ず。自れ考按をも添られ。小。三百葉許

と成る。成れば。書名をもかく負せて。側まきし置れ。るを。親き教子。一速く
乞申て見めて。同輩の兄弟小も知らせて。と。彼刊本ある著述書目小載
つ。所あり。弟子等ハ更ふも云ふ。此方彼方人より。いづくと急ぐ。其
答へに倦む。迫り。愛小已申り。人かく人かく申るを。敏く清書して
見せ申さばやと願申せ。猶よく考正して後小と。父の許しあされ。さて過
ちるを。今年ま。強てこひ申て。かく淨写して。我黨の人小見ゆる事とは成
了ぬ。かくて此論説の次第を云ふ。先始は天狗とふ名義を辨へ。其物の形
状を。和漢の書小證し考へ。日本紀の訓に依て。天狗ちふ物れ事小も及び。夫より彼
佛祖釈迦法師が。立つる戒れ許多ありて。其違ひむ者は。盡小魔道に墮つ
とふ。其道は法あるを。世の僧等の。脱れ。一人も有ま。其由を説明
され。將その物とも。三熱は苦と云事れ。因縁を。天堂地獄の。相種。其
苦患ある事をも。辨へ。閻魔地藏といふ鬼の由來。序小三途河は老婆の事小も

ねよび。夫よ。西方極樂淨土の往生といふ事までを解呈して。然る事どもは
悉く。佛祖の幻説なりしより。出來たる事なる由。博く諸經論を引て考注
され。終に小源平盛衰記あり。開元源大夫住吉と名告る者の語。太平記
あり。雲景が未來記と云物の説あるを摘出。貢高邪慢の所爲なる者。悉く
魔縁にて。果をみな天狗道に落べき事。我古學の輩といへども。其心を
皆同じ惡道に落べき由縁までを。委く辨へ論ひたり。斯てこれ神社考ハ。先生
の趣意に如く。王公大人は。敏く聞召し。今申出る。及む。此の書
は。庶人のよく読み。孰く味ひて。佛道の異端ある由を辨へ。地獄極樂あると云は。
皆これ釈魔に。變現して見ゆる態あり。事を心得て。少も惑ふ事なく。魂に柱
を太く固く衝立て。我本來の正道を守らめむ。爲ふ。かく著述せり。見む人此
意を得てよ。かく云時。文政十二年といふ年。四月。平ひら田鐵胤



古今妖魅考一之卷



平篤胤輯考

人門

備中國 堀家政富

武藏國 藤田勝誠

遠江國 中村眞幸

校同

○敘言

林羅山先生に神社考小。我邦自古稱天狗者多矣。皆靈鬼之
較著者。是非星之義也。或爲佛菩薩相。或爲鬼神貌。時時出現。
或爲狐。或爲鳩。飛行。或爲童。或爲僧。爲山伏。出于人間。其說曰。
見人福。則轉爲禍。遇世治。則復爲亂。或發火災。或起鬪諍。沙門
之有慢心。及怨怒者。多入天狗之中。所謂傳教弘法。慈覺。智證

等是也と記し。

但し此を大意を引約えて擧げられむ。委しくは本書小就て見るべし。

此餘も古く名僧大徳に聞有し僧等れ名を多く擧られ
る。或庸人は甚く驚く事あると。

但し神社考を非爲庸人而言せしは。既し序にも本文も記されし。僧等甚く右の説を惡みて。神佛冥應論。神社考私評論。同辨疑。あや云ふ書等。或著して。辨了れど。少りも破し得し。依説れし。

博聞絶倫ある。先生れ語し有れむ。決めて確證有て言

し説と。己は深く信ぜる心。身自も正し。な證を見得てお
そや。年おろ讀む書どもれ。其證と成るき事實。或ら。凡印し
て鈔録せる。甚多く成し。は。其を記し。整。少り考按を
も書加ふれむ。所思。かく名負で。得有まじく成ふ。と。
故ま於始を。天狗といふ名義の事。と論ひ起し。於。

羅山先生れ語。我邦にて天狗と稱せ。或。靈鬼に較著。記者
みて。星の義。非。と云は。星小天狗と云ふ。有れ。也。
世。天狗といふ。其星の義。非。と云。ぬ意あり。然れども
予。孰く按。其物は異。と云。天狗を稱ふ名は。かの天狗
星といふ化物の名を取。る。有。其。所謂天狗

星此事は諸越の史記漢書晉書あど云ふ史等より。天狗狀如大
奔星有聲其下止地類狗所墜望之如火光炎々衝天。あど西北
有三大星如日狀名曰天狗。天狗出則人相食。あど天狗如大流
星。色黃有聲其止地類狗所墜望之如火光炎々衝天。其上銳其
下圓如數頃田。見則流血千里破軍殺將。あど流星有光見人面
墜有聲若有足者名曰天狗。其色白其中黃黃如遺火狀。主候兵
討賊見則四方相射。千里破軍殺將人相食所往之鄉有流血其
君失地。兵大起國易政あど見えあど。

上件の文どもは目易く引約めて擧ぐられむ。少く本書と異
小見ゆる處え有はし。

此を合せて思ふ。此化物も。大凡の狀狗小類て。頭銳口喙
あど。人面小も見成ゆ。あど。天あど墜る故。天狗と名負ふ。あ
也。り。斯て此物犬の如く横行し。あど人れ如く豎行もはる
物と見えあど。

そは後の物あぐり。今れ清代小成する。述異記をいふ書より。
康熙壬子四月廿二日黎明。錢唐西北鄉有孫姓者。門未啓。鄰
人夙起見孫屋脊上有一物。似狗而人立。頭銳喙上半身赤色。
腰以下青如靛尾如篲長數尺。驚呼孫告之。甫開門。其物騰上
雲際。忽聲發如霹靂。毒蛇屈曲向西南而去也。上火光迸烈如
篲之掃天。移時乃息。數十里內皆聞其聲。亦有仰見其光者。所

謂^ハ天狗墜^ル地^ニ如^ク雷^ノ也。甲寅^ニ有^ニ逆藩^ノ之^ノ乱^ヲと見え^ニ。此^ヲ已^シい
まふ其^ノ本書^ヲ見^レざれど。村瀬^ノ之^ノ熙^グ執^ル苑^ノ日^ノ涉^トといふ書^ヲ
引^クるを。再^ニ舉^グる形^ニ也。あや漢籍^ニ。此^ノ化物^ノの餘^ハ龍^ヲをも
鳥^ヲをも。ほ^ニ石^ヲを^ニり^テ。天狗^トといひし事^ヲれ^ド。其^ヲ此^ニ
要^ルれき事^ヲあれ^ド得^テ辨^スへ^ド。此^ノ餘^ハ仙^ヲを天狗^トといふ事^ヲ何^ニ
也。其^ヲ下^ニ小^ノ辨^スふ^ニ。上^ニ
儲^{サテ}あ^ノの化物^ヲ。漢人^モ星^ニ墜^テ化^スる物^ヲ也。思^フへ^ル趣^ヲて上^ニ
小^ノ舉^グる史^ヲ等^ニ。然^レ云^フる耳^ヲあら^ニ。昭明^{下^ニ爲^ル天狗^ト所^ニ下^ル兵^ヲ起^ル}
血^ヲ流^ル。昭明星^也。とも。或^モ太^ニ白^ノ星^ヲ散^ル爲^ル天狗^トとも云^フれども。眞^ノ
の星^ニ墜^ル下^ルる^ニ由^ヲ無^レれ^ド。

漢人^ハは^ニも^ニい^フま^ス。星^ニ墜^ル下^ルると云^フ説^ヲを云^フども。眞^ノの星^ヲ墜^ル
下^ルれど^モ。依^ル物^ヲ非^ズ。此^ヲよく天文^ノの事^ヲ城^ヲ學^ビて知^ル。此^ヲ異^{ナル}妖^ノ物^ノの態^ヲと形^ヲを星^ノの如^ク見^ルる^ニ。博^ニ聞^ル録^ス。
陰^ニ山^ニ有^ル獸^ヲ焉^ニ。其^ノ形^ヲ如^ク狸^ノ。而^モ白^ノ首^ヲ。噉^ル蛇^ノ名^ヲ之^ヲ天狗^トと云^フ。
上^ニ小^ノ舉^グる書^ヲ等^ニ。は。狗^ノ小^ノ類^ニると云^フる。此^ノ録^ヲも^モ狸^ノ
如^クると云^フる。違^ハへ依^ルる似^ルる。共^ニ大^ニ凡^ノの狀^ヲを云^フへ
る形^ヲれ^ド。依^ルる似^ルるとも。鳶^ノ小^ノ似^ルるとも云^フひ^テ。拘^ル
る依^ル可^クう^ニら^ニ。

山海經^ニも此^ノ説^ヲを記^シて。其^ノ光^ヲ飛^ル天^ニ流^ル而^モ爲^ル星^ノ長^ノ數^ノ十^ノ丈^ヲ。其^ノ疾^キ
如^ク風^ノ。其^ノ聲^ヲ如^ク雷^ノ。其^ノ光^ヲ如^ク電^ノと有^レれ^ド。此^ノ妖^ノ獸^ノの態^ヲと見え^ニ。

然るを上より引くる史等小。此を星といふ所也。流星の如く
光りて飛ぶ故なり。星と思ひ過りて。種々雷同しる説ども
を云へる有りて。決めて星の化あるの非き。彼妖獸の化て星
の如く見ゆる也なり。藤井高尚説。山海經小。天門山有赤
犬。名曰天狗。其光飛天流而為星。其聲如雷と見え。五雜俎小。
俗云。天狗所止。輒夜食人家小兒。故婦女嬰兒多忌之とあり。
此を山に住む怪き物の出て。空を飛び行き。大なる流星の
形を見ゆまど。眞に星ならぬ故なり。高く聲を立て。止まる處
小ては。人家の兒をとて食ふといふは。樹神山鬼の類なり。
和名抄小。樹神山鬼。或こまを云ふ。此。木靈に類を。天狗と

も云へるあり。同じ様ある物なきを。物語ふみ小は。天狗も
あまを並ても云ふと。其天狗説よいひしは然る説あり。

けて皇國にて。此物の現れとあり。舒明天皇紀。九年二月戊
寅。大星從東流西。便有音似雷。時人曰。流星之音。亦曰地雷。於是
僧旻曰。非流星。是天狗也。其吠聲似雷耳と有る。あま始めて。此
年果して東夷に乱起し。うは。上毛野君形名といふ人を將
軍とあて討しめ給へる小。夷の軍強くて御軍敗れりる。形
名。君の妻いよく慨みて。女軍を起し。夷に軍を大に敗れて。悉
く虜小為とあり。

戊寅は二十三日あり。僧旻は元あり。我法師にて有しうは。

早く史記漢書れど此説を知居て。此時かく天狗ありとは。
断れるあらむ。

信^{イコト}和漢とも小。此物の出づる時^{ツキ}を。かく兵乱ある事を。甚も
妖^{アヤ}くし物なり。

神世^{カミヨ}聞えし香^カく背男^{セヲ}といふ星神^{ホシノカミ}を。既^{ハヤ}く健甕槌^{ケンサヅチ}神^{カミ}を誅^{ツキ}
はせしゆ。此を若くは。其流裔^{スエ}の物小非ざらむ。香^カく背男
を決^キ免て。大白金星小住^{スミ}る神あるべき由は。古史傳ふ云る
如くある小。漢籍は。大白星散^ル為^ル天狗^{テンコ}とあるを。由有^{アル}なり。
但^タし此を庸人の爲^ルいふ言^{コト}なり。

して御紀ある天狗字に傍^{ナリ}る。阿麻都伎都祢^{アマツキツネ}と付^ツるは。私記

も同訓ある。古^コに博士^{ハカセ}の深^{フカ}く思^{オモ}ひて付^ツる訓^{コト}ありて。此を皇
國^{ミコク}にて天狗^{テンコ}といひ習^{ナラ}へる物^{モノ}に。妖^{アヤ}くし物^{モノ}の。天狐^{テンコ}といふ物
の趣^{サシ}は類^{ルイ}ある故^{ユヘ}にあらむ。

埃囊抄天狗名目事といふ條に。天狗也も天狐とて書て通^{カヨ}
はし用^{ヨウ}ふ。然^サまは日本紀に天狗と書て。アマツクツネと
訓^{コト}めり。字^ジを狗^コとて訓^{コト}はクツネあり。是^{コト}通^{トウ}へる事を顯^{アハ}れ
てと云へまは。當時^{トキ}クツネを訓^{コト}し本も有^{アル}しと聞えり。舊^{フル}
く狐^コを久都祢^{クツネ}とも云^{イハ}り。

然^サるは天狐^{テンコ}といふ物の所^ヲ爲^ス。廣異記といふ漢籍に。唐汧陽
令某^{ナニ}在^ニ官忽^ニ云^フ。欲^セ出家^セ。念誦^ニ經^ニ至^ル月餘^ニ。有^{アル}五色雲生^ス其舍^ニ。又見^ル菩

薩坐獅子上。呼令歎嗟曰。發心弘大。當得上果。宜堅固自保。無為退敗耳。因爾飛去。令因禪坐。閉門不食六七日。家人憂恐。損壽會道士公遠。自蜀之京。途令子請問其故。公遠笑曰。此是天狐耳。因與書數符。當愈。令子投符井中。遂開門。見父餓憊。逼令吞符。忽爾明悟。不復論修道事。

上件の事ども。今昔物語集。宇治拾遺物語。あど小。美濃國伊吹山に聖人が許へ。佛菩薩來迎の相を現じて來れる。天狗の所為よいと能合あり。其の第三卷小引とる文を見て知べし。まゝ羅公遠が事。續谷響集五卷にも見えあり。

後數歲罷官過家。家素郊居。令暇日倚杖出門。遙見桑林下有貴

人自南方來。前後十餘騎。狀如王者。令入門避之。騎尋至門。通曰。劉成謁令。令甚驚愕。既見。升堂坐。謂令曰。蒙賜婚姻。敢不拜命。令有室女年十六歲矣。令曰。未相識。何嘗有婚姻。成曰。不許婚事。亦易耳。以右手掣口而立。令宅須臾震動。井厠交流。百物飄蕩。令不得已。許之。婚期尅翌日。成親後。恒在宅。資以饒益也。他日令子詣京。見公遠。公遠曰。此狐舊日無能。今已善符錄。吾所不能及。令子懇請。公遠奏請。行尋至所居。于令宅外餘步。設壇。劉成策杖至壇。所罵曰。汝何為往來。靡所忌憚。公遠法成。求與交戰。成坐令門。公遠坐壇。乃以物擊成。成仆于地。久之方起。亦以物擊公遠。公遠亦仆。如成焉。如是往返數十。公遠忽謂弟子曰。彼擊余殪。爾宜大臨。

吾當以神法縛之。及其擊也。公遠仆地。弟子大哭。成喜不為之備。公遠使神往擊之。成大戰。恐自言力竭。變成老狐。

玄光法師が擬山海經にも此説を擧て。其首書小善符錄而非其人。則去劉成間不容髮矣。世俗奉而為神聖者。吁可悲。云予は卓見あり。抑漢土の道士といふ者能く大旨皇國の會易家能く等しき物あり。其使いづる神と云も。安倍晴明が使へる。式神といふ物の類うぞ有べき。此を事の因小云ふのみなり。

公遠既起。以坐具撲狐。裹之以大袋。乘驛還都。玄宗視之以為歡。笑。公遠白曰。此是天狐。不可得殺。宜流之東裔耳。書符流于新羅。

狐持符飛去。今新羅有劉成神。土人敬事之。とあり。

廣異記の本文。これより要とれき文を引約めて擧ぐり。因

みいふ元亨釈書小。新羅明神者。天安二年。圓珍師泛舶自唐。歸洋中。忽有老翁。現船舷曰。我是新羅國之神也。誓護持師。教法。至慈氏下生。語已不見。珍入京。將傳來教籍。藏尚書省。時海上翁來曰。此所不堪置經書。是日域中有一勝地。我已先相攸。師聞。官建院宇。度此典籍。又佛法是王法之治具也。佛法若衰。王法亦衰。語已形隱。珍歸廬山。至山王院。時山王明神現形曰。傳來經書。宜藏此所。新羅明神又出曰。此地來世必有喧爭。不可置也。南行數里。是為勝處。珍乃與新羅山王二神。到滋賀郡。

園城寺。新羅明神語珍曰。我ト居寺之北野。時百千眷属倏來
圍繞。唯珍獨見。他人不知。自此新羅明神。威靈益顯とあり。此
事釈書れみあらば。多くの古書小見する。新羅國此神と
名告するも。圓珍は説する妄説の趣とを思ふ。決めて彼
の劉成神あらむと覺也。然依を俗に學者との説。新羅
明神を。素盞鳥尊の化現とやと云へるも有るは。餘り小事
を辨へざる言なり。慈氏とは弥勒といふ佛に事れる。其
下生とは。釋迦佛在世の時小記を受てあり。五十六億七千
万歳の後小世より出て。正覺を成びと云ふ釈家の幻説ある
を。素盞鳥尊といふで其を信じて。佛法を守り給む。佛法

是王法之治具也。云々あるも。殊に天狐の誑惑説あり。
然まは天狗。阿麻都伎都祢也訓を付するは。皇國にて天狗
と云ひ習へる物の所為此。かの天狐といふ物に所為は類
する故。然よみする事疑れく思也。

然らでは字の倂。アマツイヌ也訓なき。アマツイツネ
と訓るを。然る事或思ふべし。得よむまじり訓あるや。

まゝ仙家に説を攷る。まゝ抱朴子對俗篇。彭祖言。古之
得僊者。或身生羽翼。变化飛行。失入之本。更受異形。有似雀之爲
蛤。雉之爲蜃。非人道也。まゝ至理篇。或有邪魅山精。侵犯人家。
以瓦石擲人。以火燒人屋舍。或形見往來。或但聞其聲音言語と

見え。まゝ登渉篇小。萬物之老者。其精悉能假託人形。以眩惑人目。而常試人。唯不能於鏡中易其眞形耳。是以古之入山道士。皆以明鏡徑九寸已上懸於背後。則老魅不敢近人。といひ。但し彭祖がいちめる神仙の事迹を。粗皇神の道は等しく。彼天狐老魅あといへ依類とは。甚く異形れや。其形狀の稍似あるは。小姑く徴し記せるあり。

は。山人に説を傳聞する。小。魍魅といひ。天狗とせふいふ物の本は。鷲鷲狐を更小も云。餘の鳥獸も。數百千歳を経ては。鳥を兩翼より手成生じ。本より此兩足小肉を生じて立ち獸は前足小翼を生じ。異形あら。稍人より似る形と化て豎行

し。共小飛行する。中。小。翼れくて飛行する。亦も有りと聞ふ。

其中にも雷獸を。狸に似て空中を翔る物ある。上小引る山海經。博聞錄などの説小符ひてきあ。星の如く光を見ゆる天狗を。此物に年經する。化る依あらむも知べうら。其飛ぶ時。雷の如き聲を發きといふも。由有て通え。杜甫が天狗賦小。夫何天狗兮。氣獨神秀。色似狡獪。小如猿狖。忽不樂。雖萬夫不敢前兮。非胡人焉。能知其去就。と云へるも。猛獸と通え。ちて山人の傳説といふを。異み思ふ人有べりれや。此を仙境異聞とて。別小聞書せる物數卷あり。其を見て知るべし。

此小就^{ツキ}て思ふ。古の博士^{ハカセ}も。若^モくは天狗を。狐も化^カる物ぞといふ説の舊^{フル}く有^ルしを。かた^レくも聞知りて。彼訓^{カノヨミ}を付^ツけり。むも知^ルるらば。

谷川士清の言ふ。源氏も。てむぐあふまと云ふ所も。魑魅^{チミ}は類^{タビ}ひて。或^{ナニ}は老鷲の化^カる物といひ。日本紀の訓^{ツキ}ふよりて。天狐とも物^{モノ}は書^カれた。天狐小。天狐地狐人狐^{リキ}は別^{ワケ}有^ルて。今いふ天狗を。元よ^{アツキツネ}て天狐也と云へて。四八目類函^{シヤク}小。狐千歳與天通^ス爲^ル天狐^トと見^ミゆれむ。然も有^ルるし。獸^{カモノ}ひてはまみ狸^{タヌキ}といふ物を。天狗也云へり也。有^ルて。士清^{シセイ}が言^イふ。老鷲の化^カる所と云ふ説。ま^レ天狗を元よ^テて。天狐ありと云へる説を。何人の

説あらむ。古人の説と聞^キゆるが。仙家の説^{カナ}う符^キひて通^キゆ。以て士清^{シセイ}が謂^{イハ}ゆる。地狐人狐也云ふ物^{モノ}は事を知らぬと。天狗地狗也並^{ナラ}べて云^イふ所^所は事^事も。愚管抄^{ウツクサ}七卷も。後鳥羽^{ゴトウ}天皇の。武家を悪^{キヲ}ひ給^{イタ}ふ事を。諫^{イサ}め奉^{ホウ}ると。記^{カキ}出^{イデ}りむと思^{オモ}ゆる處^{トコロ}小。撰^{セン}録と武士^{ウシ}を。一^ツつ小^コれして。文武兼行^{ブンブケンギョウ}して世を守^モて。君を後^{ウシロ}見^ミ参^{マシ}らばべき。成^{ナリ}ぬるう也。見^ミゆる所^所也。是^レを一定八幡大菩薩^{ハチマングサ}の御計^{ミケ}ひう。天狗地狗のわざうと。濃^{フカ}く疑^{ウタガ}ふべしとあり。天狗とは元來^{モトヨリ}いなる天狗をいひ。地狗とは後^{ノチ}小僧^{ソウ}徒^レら^ラが化^カまるを云^イふ所^所は。や。詳^{サカ}あらむ。

は^レ抱朴子^{ハクハクシ}も。物^{モノ}之^ノ老^{ナシ}者^{モノ}多^シ知^チ。率^ネ皆^{ナラ}深藏^{シンサウ}遠處^{エンジョ}。故人^{コト}少^ニ有^ル見^ミ之^ヲ耳。

千歳之鳥。万歳之禽。皆人面而鳥身也。と見え。仙家の説。天狗
ちふ物の本也。鳥獸あり。數百歳を及て兩翼を生じ。飛行
と云ふを。上り引く。漢籍等云へる。天狗小翼有りと聞え
ざ。中ナカは翼あくて飛行を。有と云ふ物ある。但し天狗とこそ云は。正タカる世といふ天狗の状。て翼あ
る物。漢土にも在る。と。抱朴子の説。て炳ヒルく。ま。下シタ小舉
ふ。依尚書故實とい。ぬ書小。記せる事を見て知べし。
儲サテま。世り天狗也云ふ。上り論へ。依種タカくの物。化ナれるは
更あり。羅山先生の説。れ如く。多くは僧山伏あとの化。ま。依鬼モノ
を云ふ。何故ナニユエり。其を天狗とい。初ハジメりむと考カガふる。小。高鼻長喙

小。頭カシラを。加の天狗。小。ち。似て山に住み。世り災異ワザハヒあり。こ
も。あれ天狗。小。類タナれ。あ。後白河上皇。小。見奉ミマシて。開發
源大夫と名告白ナノリヲせる。物の語コトバ。僧等の化ナる。靈鬼モノの事を語
て。其形。頭を天狗。て。左右に羽生ハカヒと。有ルを思ふ。し。
此を源平盛衰記に見ミる。事。る。世。小。いふ天狗。れ。事。成。
正タカや。小。語り傳ツ。て。第四卷。小。舉アゲて。少イサり注ツせるを見よ。
頭カシラを天狗。て云く。や言。依モトて。元。よ。天狗。といふ物。有。て。
僧徒の化ナれる。靈鬼ソレの。其。小。似ニる。故。り。其。名。を取て名とせる。
事は。知ら。む。と。

埃囊抄。小。諸道。れ。長者。諸宗の行者。慢心。小。依て。天狗。也。成。是

るは其名も同りきと。種類各別あるも云へるは實然る
説あり。まゝ同書ふ。八坂の寂仙上人遍融。七天狗繪といふ
事を書れり。と有る。寂仙上人といふも。何頃の僧れらむ。
七天狗とは何くぞや。此繪卷今も傳れるもや。見ま欲れ物
あり。俗小事れ成。かゝれ事を。八天狗を使ひても。成。か
らむあや云めり。え。斯る物小由ある言もや。まゝ京れ愛
宕山よ上。て見しかむ。宮の後。八天狗社と云。か有りき。
後。愛宕山大權現。強敵退散法といふ物を見る。小太郎坊。
火乱坊。三密坊。光林坊。天南坊。普賢坊。觀喜坊。東金坊。あとい
ふ。天狗の名ども見え。是等を祭れるもや。

斯れば法師。ちけ化。鬼を舊く天狗と云ひ來れ。と。眞
の天狗。非。其身。翼生。して。多。は山。住む。魑魅の類
小入。て。釋魔と云。べき物。有る。

漢籍尚書故實。いふ物。章仇兼瓊。鎮蜀。日。佛寺。設大會。百
戲。在庭。有十歲童兒。舞。竿杪。忽有物。狀如鵬。掠之而去。群衆
大駭。因而罷樂。後數日。其父母。見在高塔之上。梯而取之。則神
彩如癡。久之。方語云。見如壁。畫飛天夜叉者。將入塔中。日。飼果
實。飲饌之味。亦不知其所自。旬日。方精心如初。と。此。天
狗。とは無れ。と。正しく翼有し。天狗。小て。魑魅の類と見。第
二卷。論へる。東大寺の開基。良辨を掠去れる。驚も。此類の

釋魔あり。先達センダチも多く。漢土カンチにもせういゆ如き。天狗も有といふ證アカシ。この尚書故實の説を引くと。谷川士清云く。五朝小説ゴカクに載ヌく。飛天夜叉といふ物。塔より下りて婦人を捉ツカむ。形梟カウ鸛センに似ると云ひ。廣西通志コウシツウシに。一人約ツカを爲ナす。長二丈面潤ヒロさ三尺餘り。長さは一倍ヒトを被カ髮ヒ鳥喙ヒツ背セン小二翼あり。と云ふ物。世にカナいふ処トコロよく合カへたと云ふ。はと漢土カンチの治鳥といふ物なり。此もいづゆる天狗に似たる物あり。其を本草綱目コウモクに。越地エツチ淡山タンサン有之。大如オホニサ鳩トビ青色穿樹クワンジュ作窠サカ大如オホニサ五六升器。口徑數寸。飾以土堊ツエ赤白相間サマ狀如射侯セコウ。伐木者見此樹キ即避之ヒク。犯之則能役虎害人ニク。燒人廬舍ニク。白日見之ミ鳥形也。夜

聞其鳴ミコ鳥聲也。或作人形長三尺入澗中取蟹カニ就人間火炙食シ。山人謂之越祀之祖とあり。此も一種の妖物ヤカモノにて。正ただ天狗の類と見えしなり。寺嶋良安云く。先輩センパイ僉ミナ云。治鳥乃本朝所謂天狗之類矣。羅山文集云。日光山有天狗好棲息于長杉。猶是愛宕山大杉。榮術太郎之所居之類也。欵ツキ蓋指サシ鬼類キリウ而言也。といひ。まゝ北國能登海濱ノトノ有天狗。爪ツメ往ヒ拾取ヒ之大オホ二寸許。末尖微反ミ色潤白如小猪牙。而非牙全爪之類也。疑此北海大蟹之爪也。欵ツキ若夫天狗之爪者。可有處レ淡山中。何有海邊耶。とも云へり。天狗の爪と稱する物を。何物の爪といふ事いまいと思ひ得オモ。

抑釋魔といふ稱を。佛籍に有るにや無るにや今覺えん。若無
らむは。余が新に設くる名と知れし。然るはまた天竺にて。
魔と云ひ。魔羅と云ふ語意を考めり。固有の梵語にて。自然
小して靈異ある物をさして云ふ稱あり。然るに惡き物のよ
と聞ゆるは如何といふ。佛道は相反して。其道の妨げと
爲す。障りを作す物あるは。彼道よを良らぬ物故。佛者よ
惡く言貶せるなり。其に三藏法數十魔の下。華嚴經疏を引
て。魔梵語具云。魔羅華言能奪命。謂能奪智慧之命。又翻作障。能
於修道之人而作障難故也。

按ずるは。大論に。魔羅或言惡者。多愛欲害出世善根故。

也とも有る。して俗に男根をマウラと云ふも。佛道より賤め
ある名をも思ふ。然らば。此をもマウラといふ語の約
まれなり。固より正し。古言ある。男根れみあらば女
會ふも通る名れり。其にマウラは眞心にて。彼處を眞情に
凝結する處ある故。專と稱ふ名あり。す。云ふ梵語も
同義と聞えり。猶委くは古史傳あり。印度藏志に説注せ
るを見るべし。

一 蘊魔。謂色受想行識五蘊爲魔。蓋貪著五蘊起惑造業也。

五蘊といふ事哉。經論にも小説る様いと言痛く紛々しけ
き也。語易く言はる。此身の地水火風の四大。および四大の

造せる色を色蘊ナヅと名く。百八煩惱等ナモを身カラダに受ウケ持ツて。受蘊と名く。小大無量の想オモひ和合ワガフするを。想蘊と名く。好醜オモシロを因ユヅルて。貪欲オホセ嗔ウレ恚ウレ等ナモを心ココロを起オコし。善惡諸行オホセを作ナすを行蘊と名く。眼耳鼻舌身意の識チを以て。無量ナモを分別心オホセ起る故。識蘊と名く。是五蘊あり。蘊を積集オホセの義とも。蓋覆オホセの義とも云ひて。色受想行識はよく眞性を蓋覆オホセにせ云ふ義をもて。五蘊と號ナヅへ了サツて此五蘊を皆空ありと明悟サツして。貪著せざる故五蘊實相といふ。實相は眞如無妄の理と云ふ。五蘊を皆空と見る。おき眞實の佛道あるを。其ソノに貪著オホセして惑マヨを起オコし。業を造ツクれむ。五蘊はやがて魔といふ義コトも。蘊魔と名けざるなり。

二煩惱魔ナモ謂イフ一切煩惱之惑マヨ爲ス魔マヨ蓋貪著五塵起諸煩惱也。

按サツずるに五塵とは。色聲香味觸をいふ。まゝ大論に。謂イフ百八煩惱等分別。八萬四千諸煩惱とあり。五塵を三藏法數サンザイホフに。法界次第を引ヒキて。眼メ所見ミ青黃赤白黑。及ナド男女形貌等色。是名色塵。耳ミミ所聞ク絲竹環珮之聲。及ナド男女歌詠等聲。是名聲塵。鼻ハナ所嗅ク梅檀沈水飲食。及ナド男女身分所有香等。是名香塵。舌ゼツ所嘗ク種種飲食肴饌美味等。是名味塵。身ミ所觸フ男女身分柔輒細滑。及ナド上妙衣服等。是名觸塵。塵チ即スナハチ垢染之義。此五塵能サツ染汚眞性故也とあり。此五塵に貪著オホセするより。諸煩惱起オコる。其ソノを煩惱魔と云ふなり。

三業魔。謂一切惡業爲魔。蓋殺盜姪妄諸罪也。四心魔。謂一切我慢之心爲魔。蓋心懷貢高常生憍慢也。五死魔。謂人壽盡命終爲魔。蓋業報已畢。捨離現生之處也。六天魔。謂欲界第六他化自在天爲魔。蓋此天爲欲界主。見人修道以爲失我眷屬。空我宮殿。卽興魔事。惱亂行者也。

按づる小同書四魔の下小。瑜珈論を引きて。天魔若人欲超越三界生死。作障礙發起種種擾亂之事。令不得成就と云云。是此自在天といふ物を。世に第六天魔王とも云ふ物なり。此を魔とも言へるは。佛道を惡み嫌ふ由りて負へるなりと。佛道よと云ふ然も云々免。他よとは然しも憎み云々

修き物小非也。然るは此天佛書とも小云ずる趣を考ふ所小。子孫を相續して人道を行ちむと云ふ物あり。然る小佛法を其を魔事と立とる道あり。其道は違へ故に魔といふ所あり。自在天よりは。佛道をこそ魔道と云ふ所あり。然るは子孫を斷絶して。人道は違へむなり。但し此は庸人の爲り。いふ言は非なりし。

七善根魔。謂著所修一切善法爲魔。蓋修行之人或得一善。卽生取著之心。更不加修也。八三昧魔。謂著所得禪定爲魔。蓋修禪之人得三昧。久味耽著不求昇進也。

佛法者小。或を一經に依り。或一偈一呪に依り。或は一佛一

并一天一明王を採て外を顧ざる者甚多有り。此文小依きは善根魔の人あり。三昧を梵語なり。譯して正定と言ふ。さて禪家此學匠。此の如き人甚多し。即三昧魔の人あり。九善知識魔。謂慳吝於法爲魔。蓋於一切諸法起執著心。不能開導於他也。十菩提法智魔。謂著一切法而爲魔。蓋修行之人於菩提之法起智執著堅守不捨也。

諸宗の學匠。小。か。依人甚多し。即善智識魔の人あり。菩提を梵語あり。譯して道と言ふ。佛道修行此人を普く觀る小。此魔を脱れざる人も多く有はしく思也。

はと翻譯名義集小。大論。瑜珈論あどを引きて。四種魔を明し。

今謂煩惱魔。是生死因也。五衆魔。死魔。是生死果也。天魔。是生死緣也。と云ひ。

五衆魔とは。上。小。い。ち。も。る。蘊魔あり。れ。ち。此。餘。小。愛魔。婬魔。罪魔。行魔。惱魔。あど云ふ目あど。皆上ある。十魔は具れ。故。今更小記し出せむ。

魔字は古譯の經論。石小。从。小。磨。字を書し。を。梁武帝が時。小。磨。を能く人を悩ませむ。字。或。鬼。を。从。磨。し。とて。作れる由言。上。件。三藏法數。名義集とも。小。此。小。用。あ。き。文。を。省。き。て。目。易。く。記。せ。り。具。は。本。書。小。就。て。見。る。法。し。

葬喪記。棺前設燎火。以去諸魔。此謂阿良知氣と有り。然れむ

魔を呼ヨビし古言も有り也。されど他書アタレフミ小見ざる言コトれまは猶ナホよく考ふべし。而て魔の本説を。上より引ふる佛書どもれ説の如あれど。釋子と成りて。其道より入るるは。其本教の如く。十魔のホト繼ナゴリは餘波タチヌテなく截捨て。生死を出べき事ある。其を人々る者れ。決めて成得ナシクまじた所爲ワザあり。人々決えて成し得ざるを。成さぬと。是ぞやうて魔道を依故る。古今の釈子悉く生死因する煩惱魔を更サなり。生死果する蘊魔死魔をも去敢サリふ。此より去畢ハテまでには魔を脱トモカる。況て其戒の多端ある。菩薩戒を姑ナラくねきて。沙弥の十戒を事ふも非アラ縁と。其ソレら佛書ども小。一殺生戒。常念有情皆惜身命。當憐愍愍ニ慎

勿傷ムレ二偷盜戒。物各有主。雖一針一草亦不當攘竊。三不淫戒。清淨自守。不犯色欲。四妄語戒。言說誠實。不以虛言誑サ他。五飲酒戒。酒能昏神。乱性增長愚癡。當絶飲。六離高廣大牀戒。所坐之牀。高不過尺六。廣不過四尺。若過此量。則不可坐。七離花鬘等戒。不著花鬘瓔珞。不用香油塗身。八離歌舞等戒。不自歌舞。乃不觀聽。不蓄樂器。九離金寶物戒。金銀錢寶不當蓄積。亦不許手執。十離非食時戒。佛制午時為食時。若過午則不當食。と有れむ。然る容易に持するべき事ある非也。比丘乃至しては。具足戒とて二百五十戒。比丘尼は三百五十戒あり。

此の諸戒を鏡規とて。諸宗の祖師聖人と云ふ僧ども。古今に僧尼を照し觀るふ。よく其法規ふ叶へてと見ゆるは。吾いま此を見。近くも名義集。釈氏要覽。大藏法數といふ。記せる戒の處を讀み。古今に僧尼の行狀ふ合せ見て知るべし。

此餘に誡めし條戒は。限なく多うれど。此禁を持ちしるも。彼戒を得持し。彼禁を持ちしるも。此戒を持ち敢て破戒ふ坐し。常小口實とせる幻說。やがて因宅あり。然る妖魔の果を感得し。自法やがて自縛とありて自縛し。自業の自刑を自得して。自造の惡道小歸し。妖魔の部屬と成こと。佛子

と云へども人子あるふ。甚も悲き因果ありかし。

金剛三昧經に。自念起相。自繫縛。以繫縛。故則是地獄。雖非是有。而令受者受。彼苦云くと有るを。即此義を明せる說あり。

此を尋常に靈鬼とは。其因縁異ふ。佛道有し以來。やがて其道小よて化す。其事を行ふ妖物なれむ。彼道小用ふる魔字を用ひて。釋魔をも稱ふあり。然るは此戒舊く。天魔とも天狗とも稱へまとも。天魔と云ふ。上論へる如き物なれむ。釋子の化れる魔の號ふを當らば。ま此を天狗と云ふ事も。佛經等小無れをある。其は早く無住法師が砂石集小。天狗と云ふと。聖教に慥なる文を見及ぶ。先徳の魔鬼と釈せる是

ふや。天狗と云ふを。日本人の云ひ習はしあり。佛法者の中。破戒無慚の者。多く此報を受く。我相憍慢名利諂媚等此業を。佛寺に交ふは。定めて此道に入ぜしと云ひ。

埃囊抄。天狗と云を。聖經の中に見及むべし。砂石集。云。了れど。古徳の釈。天狗者。天光明義自在義。則表佛果。狗痴闇義。不自在義。示生界。則是生佛不二名也。又。天曼荼羅。是金剛界。狗地曼荼羅。則胎藏界也。殊小聖教中。天狗と云を。魔王所部の從類あり。妙善王。金著女也云。天狗首也。也。見えしと云。了れ。却て覺束あり。延命地藏經といふ物。天狗土公大歳神と云ふ事あり。此を正しく俗

云ふ天狗を云へるあれど。此經を此方にて偽作せるあり。證とは成らぬ。又。或人正法念處經觀天品。有大光明遍虛空中。如火炎熾如大天狗。從天而墮云。彼天狗量五千由旬。一切虛空皆悉炎然とあるを。世にふ天狗の本文ありといふも。此を天上の光物に事。初に引くる史等。天狗や云ふ。小效ひて釈せる文あり。妖魔を云へるに非れ。是まゝ謂ある天狗に證とは成らぬ。

谷響集。此邦天狗從我教見之魔類也。此邦何謂無魔哉。凡出家人無菩提心。我執憍慢專求名利。經名魔業。如是之曹當作天狗也と云了。

聖賤集ふも。圭峯レ于蘭盆經疏ニ。橫行曰畜豎行曰鬼ト。釈トり。日本の天狗ト。山伏ノの如くレて豎行するなり。是鬼ノの形あり云云へり。此レも無住法師ノ書あり。

けり魔業といふ事は。華嚴經離世間品ニ。忘失菩提心修諸善根是為魔業。於甚深法心生慳怯有堪化者而不為說。若得賤利恭敬供養雖非法器而強為說。是為魔業樂學世論巧述文詞。開闡二乘隱覆深法。是為魔業增長我慢無有恭敬其心弊惡難可開悟。是為魔業トなり。

空華老人の名義考小も。此文の半ナカをひきて。眞實の道念无して。或ハ我慢勝佗れレめ。或ハ名聞利養レ為ル。善根ヲ修

する者多し。正しく魔道ノ入ルの正因あり。此經文信ニ天狗道の證文あり。と云へるは實然ニなり。

はハ大虚空藏所問經ニ。不護菩提心是為魔業。於諸有情簡別行施是為魔業。樂求生處而持禁戒。是為魔業為求色相而修忍辱。是為魔業作世間事。相應精進是為魔業。於禪味著是為魔業。以慧厭離於下劣法。是為魔業在於生死而有疲倦。是為魔業作諸善根不迴向。是為魔業厭離煩惱。是為魔業覆藏己過。是為魔業業背恩不報。是為魔業不求諸度。是為魔業慳惜於法。是為魔業希利說法。是為魔業離於方便。成就有情是為魔業。毀破禁戒是為魔業。順聲聞行是為魔業。順緣覺乘是為魔業。要求無為是為魔業。

魔業厭離有為是為魔業。心懷疑惑不利有情是為魔業。好疑不通達是為魔業。好懷詭詐假示哀愍是為魔業。廣橫惡罵是為魔業。於罪不厭是為魔業。深著自法是為魔業。少聞便足是為魔業。不淨心口是為魔業。とも見也。

但しおも甚く文を省きて引たり。委くは本書を見たり。

はく釋氏要覽云。魔逆經ある魔事といふ事を釈す。瑜珈論を引て。魔事者於利養恭敬稱譽心樂赴入。或放逸慳悋廣大希欲不知喜足。忿恨惱覆矯詐等。皆是魔事と云へり。

まゝ大般若經云。魔事品あり。楞嚴經云。五十種魔事を説り。色受想行識云。各十種ある由あり。披き見るべし。

此等れ文を見通して。古の名僧れ中云。戒行を持て。名利の爲小。善根成就せる倫を稽ふる云。まづ古く世に聞えあるを。道昭和尙ある云。此法師れ事を。文武天皇紀四年三月己未、日の下云。道昭和尙物化。天皇甚惜之。遣使吊賻之。和尙河内國丹比郡人也。俗姓船連父惠釋少錦下。

船連云。姓氏錄右京諸蕃下云。船連菅野朝臣同祖。阿太郎主三世孫。智仁君之後也。又云。菅野朝臣出自百濟國。孝慕王十世孫。貴首王也。と有りて。百濟人の末裔あり。惠釈を皇極天皇の御世云。蘇我臣蝦夷が誅せらるる時。國史を悉焼くむと爲し。火中より取出る人あり。少錦下云。孝德天皇の

御世小定られし位あり。

和尚戒行不缺尤尚忍行。嘗弟子欲究其性竊穿便器漏汚被褥。和尚乃微笑曰。放蕩小子汚人之床。竟無復一言焉。

史ミナミはかく戒行不缺と有れ也。其靈の語コトバ。一生の中ウチ戒行相應せむ。破戒の罪重しと云ふれむ。缺カケし戒行も甚多イトオホかましと見也。

初孝德天皇白雉四年隨使入唐。適遇玄奘三藏師受業焉。

今昔物語集イメキモノも此僧の事を記して。智廣く心直し。道心盛サカリふして佛の如くあり。然れむ世人公より始免。上下の道俗男女カウベ首を傾りて貴タタムひ敬ウヤミへること限カギリ無し。而シカる間マヒタ天皇道昭

を召て仰給オホセタマえく。近來聞チカゴロキは震旦小玄奘法師と云人有りて。天竺小渡カヘリキタ正教を傳へて返來ると。其中ナカ大乘唯識といふ法門有りと。其教法いまマ此朝チカよれし。汝彼國へ罷渡りて。彼教法を受て返るマばマと。道昭宣旨を奉ウタガハて。震旦小渡マとぬと有マ。但し其傳の中ナカ唐土タウ逗留の内ナカ新羅國シンラ渡り役マ小角コカク相見せる由を記せマ誤アヤミあり。そは佛仙のところ。小角が傳の中ナカ辨へしを見るマばマ。

三藏特愛令往同房。謂曰吾昔往西域在路飢乏無材可乞。忽有一沙門手持梨與吾食之。吾自啖後氣力日健。今汝是持梨沙門也。

佛經の定水る因縁の幻説を效て。玄奘法師が幻説せるれ
了。まゝ若くは。道昭法師が幻説せるを信とあて。史小記さ
れゆる。左まれ右はき。妄幻の説ある。信ぜらる。又
謂曰。經論深妙不能究竟。不如學禪。流傳東土。和尚奉教始習
禪定。所悟稍多。

はま皇國の僧れ。禪法を習へる始めなり。

於後隨便歸朝。臨訣三藏以所持舍利經論咸授和尚。而曰。人能
弘道。今以斯文附屬。又授一鐺子。曰。吾從西域自所將來。前物養
病。無不神驗。於是和尚拜謝啼泣而辭。及至登州。使人多病。和尚
出鐺子。煖水煮粥。遍與病徒。當日即差。既解纜。順風而去。比至海

中。船漂蕩不進者七日七夜。諸人怪曰。風勢快好。計日應到本國。
船不肯行。計必有意。ト人曰。龍王欲得鐺子。和尚聞之曰。鐺子此
是三藏之所施者也。龍王何敢索之。諸人皆曰。今惜鐺子不與。恐
合船為魚食。因取鐺子拋入海中。登時船進還歸本朝。

佛法の幻説既小。靈ある物の生とし生るは更あり。金石草
木小さず及び。喧響立てあゆ故。かゝる異驗を有なり。怪
む足らぬ。猶次く小も。斯る事の出らむ処く小云べし。
於元興寺東南隅。別建禪院而住焉。于時天下行業之徒從和尚
學禪焉。於後周遊天下。路傍穿井。諸津濟處造橋。乃山背國宇治
橋和尚之所創造也。

是本朝子禪といふ佛法を行ひし始あり。委くは印度藏志
小云所りき。まゝ宇治橋成造れるを。後世までのよた功あ
り。然れど其は。名聞利養の心よりて為るるにて。魔道に落る
因縁ありしと通えり。

和尚周遊凡十有餘歲。有勅請還還住禪院坐坐禪如故。或三日
一起。或七日一起。儵忽香氣從房出。弟子驚怪就而謁和尚端坐
繩床。无有氣息。時七十有二。弟子等奉遺教。火葬於栗栗一本原。
天下火葬從此而始也。世傳云。火葬畢。親族與弟子相爭。欲取和
尚骨。斂之。飄風忽起。吹颺灰骨。終不知其處。時人異焉。と有る。
今昔物語集に。道昭が唐土の玄奘法師が許小居りし時。

玄奘が弟子。其宿房を竊小伺牙は。道昭が口より光を放ち
しと云ひ。死期も兩牙より光を放ちし。壁を透りて庭
松を照し。良久して。其光西を指て去き。由見しは。靈異
記ある。常昭が事を錯り傳へし物あり。元亨釈書にも。や
がて其錯を受けて記せられ。云ふ足らば。常昭が事は。屍解仙
の処に云所り。釈魔の態として。かゝる異を示はること常
あり。怪むべき小非也。又釈書に。弟子思其兩牙放光。欲收之。
而先為鬼神取去。闍毘之後。欲取其骨。暴風忽來。骨灰共失。と
有るは。國史の文に依て。撰者此例の妄説を加へるあり。
國史に如此を見えしととも。此僧案小。破戒の事とも有り

て魔道マダウ小落オチり。然サるは明慧上人傳といふ物。或シ時上人云く。去イニシころ笠置カサギ此解脫上人來臨して語カりらく。

解脫上人とは。釈シヤク負慶をいふ。少納言入道信西の子あり。建曆三年二月三日。五十九歳ハて寂ニせり。此コノ古事談コトワタシのは。辨ハ入道貞憲サダノ子と云イふ。明慧上人とは。釈シヤク高辨をいふ。

秋アキ比明アカ小晴ハレる夜ヨ。人數アタタ來る音ナゲして。草菴サウの窓マドを叩たたき。謁テツせむ事を望ノゾむ。扉トビラを開アけて出向イデふ。異類異形イリイリれ者モノども其數あじき。其中ナカ然サレべき仁ニトと覺オボしくて。雪ユキの頭霜カシラの眉ユヅある老僧。香スミ染シメの衣キを著キて。面貌オモテ事コトがら此世の人とも覺サえぬ体サマひて。進寄スミヨリて語カ云く。定サえて聞及キコ給タマはむ。我イニシを往時ナガシ何某ナニガシと云イはし者あり。

按アぶる小文勢フミサマを見ミゆ。此時老僧その名告ナリせる事疑ウタれし。然シカれども此傳コノを記キせる人の。此コノを傍カタヘ痛イタイき事コトあれむ。憚ハカて態フサと名ナをは著シレる。依ヨあり。其は同じ佛道の人ハゆキばあり。さサまは佗ホカよホて何ナニう憚ハカらむ。誰タレあらむと考カふシべきに。

佛法フツポフ小於オキて。隨分トシツモ小行學コウガク年積トシツモりて。深理シンリを究キウる由ユを存ゾンじき。然シカれむ其頃キタマ天下カタクは肩カタクを並ナラぶる輩トモガシラ无ナりき。皆是シレ世の知チ所シヨれに。然シカゆキ唯タラ此大乘オホマサの本源ホンネ。究キウめむ事を先マとマて。強アガく戒ケイを專モトとトる事無ナりた。仍ヨリて破戒ハケイの事耳ミミあり。其故ナニガタ大乘オホマサの本源ホンネを究キウるれども。一生シヨウ中ナカ小戒行相應コケイコウオウオウせに。破戒ハケイの罪ツミれ方重オモシなり。依ヨて。魔道マダウ小入オチり。古コよホて天竺テンシク震旦シント本朝ホンチャウ。名ナを得エる。

貴僧高僧とす。此戒力ある人。一劫二劫。まゝ三四劫も。此魔道
小落とる類。あげて計たうらむ。此魔道の習ひ。一度落ても。急
に免れ出ゆ事難し。我を二劫小此業を果すべきあり。入滅の
後五百餘年小及べば。久し心地し給ふらむ。

按ずるに解脱房を。順徳院。天皇乃建暦三年に。建保と改元
有し。二月寂せむ。此老僧の靈に來りしを。其より幾ばう
に前ありらむ。姑く解脱房が寂せる年。此事として。靈に語
小依て。五百餘年を操上りて。その頃小大乘の經旨を極め
て。其世に肩を並ぶる者なく用られ。かた長命れし僧を。
誰あらむと考ふ。道昭法師も有る。其を上小舉とる

文武天皇紀に。四年二月小。此僧の物化せる由なり。其年よ
に建暦三年まで。其間五百十四年あり。

然れども其五六百年を。万億重縁ても。猶其一劫小も及ばら
らむ。況や二劫を過べき末哉思ふ。味氣なき事なり。我を大
乗の義を明ししに依て。此業を償ひ果てば。佛果を證しべけ
む。多劫の間徒ら。苦患のみ沈みて過行すと。偏に戒律の
闕する故あり。今見ゆ小末世あれども。道を修むる志深切な
る類あり。此を人間に普く示し知しめ度て。此菴室小列參せ
て。後學小傳へ誠め給ふなり。

今按ず憐むる。道昭此道小落ても。れを末其道やうて。佛

祖の假説有しよ。出來たる道あり事を悟らば。佛果とて
異小證すべき道の有て。多劫を経て。其道小至らば。事
此如く思ふは。早く先輩此其道小入りて在る。ある証
惑はるを。實と思ふ也。佛法の極意を。即心即佛即身
即淨土。説得べき道も。行ふき淨土も有。おとれきを有
と示さる淨土は。其もやうて。佛祖此假説有しよ。姑く妖
魔の変現はる淨土。彼も此も神の道よ。云とた。魔
道を免れ。然れど其を因縁小引き。迷惑心小こそ有
れ。我が苦道小落たるを前鑑と爲しめ。後人。戒を持しめ
て。我が落たる惡道小落さじや。かく態と列參して。心を

添へる志を。發露懺悔の意。も叶いて。殊勝あり。云。
とて此は某。彼を何某と云を聞く。古。みか名を得。し。僧
侶等あり。今ハ既。佛果小至ぬらむと思ひし人等。如何し
て斯を成ぬらむと。不思議。覺えて。偕如何。御苦う候と
問。うは。或は諸の異類。此者來て。身の肉を食ひ。命を奪ふ。
其苦小堪へして。絶入て。暫く有り。生れ。異類現じて。
頭目髓腦手足を截取する時も。或は猛火現じて。全身を焼
く時も。是。或れをち殺盜淫の果あり。或は黑白の二鬼現
じて。鐵箸を以て。舌を抜き。或は熱鐵を吞しめて。遍身焦れて
炭の如。ある時も。是。妄語飲酒非時食。此の如。

苦み。一日小三度五度人ニ隨シテひ時ニ依りて。様々ニ小換カ依カあり
と云ひて。搔消カキケスやう小失ウセとてとぞ。

是までは解脫房ゲトウが夢ユメ。道昭の靈と對問せる有趣アリサシなり。以
下ゲ解脫房ゲトウが云フ牙ハ依言イゴンを。明慧房メイエイが弟子トシ小語コゴれる趣あり。
三熱シルシは苦クの事コト。下ゲ小別コト論ロふを見よ。

此事を思ふヲ。是實語シツゴあり。尤慎モトモツシむべき事あり。今は諸宗を學
ぶる者有れども。戒を知れる輩トモガラハあし。況や受持トモカする類タビや。
今イマを姪酒シヤウを犯オカしる法師ホウシも希コト。五辛ゴシン非時ヒジ食シキを斷タテて依僧イソウも
れし。是カクの如カき不當フタヘ不善フシに舉動リウドウをもて。法理ホフリを究キウとてとも。魔
道マダウ小入コニあは。多劫タキョクの間苦マノカラを免れぬ。如何イカニして戒門ゲイモンを興行キョウコウす

はき方便ヘンポウを廻メクラさむと云れし。大抵オホテ小其謂コソノイハレ有りと。明慧房メイエイが
語れる由見えとて。

文フミをいふく約ツグめて舉アゲとせば。委オモくハ本書ホンショに就ツキて見るはし。
明慧房メイエイと解脫房ゲトウが事は。あや別ワケ小考コカウあり。下ゲ小云コトを見よ。

此來れる靈の語コト。入滅ニツクの後ノチ五百餘年ゴヒヤクニヤウと云フ牙ハる年數ネンズ。まゝ其
頃トキ天下テンカ小肩カタを竝ナラぶる輩タビ无ナりきと云へ依語イゴ。まゝ大乘ダイショウを學マナこ
りニと云へ依語イゴ。まゝ雪ユキれ頭霜カウシヨウの眉メイある老僧ラウソウは。香深カウシンの衣著イセキあ
るや有アルあどカ成ナリ合せ考カウふる小。道昭ダウショウ法師ホフシれらで誰タレり有らむ。

禪ゼンを楞伽經レウカキョウをもて第一ダイイチといふ。是コト大乘ダイショウといふ經キョウハ中ナカ小も。
最モトモト物モノあり。物化モノカの歳サイも。七十二歳ニジュニサイある小。上カミり舉アゲる

傳ふ見えあり。

此僧の父を。船史惠釋とて。國史に大功有りし人なり。其子とて。過りて釈子と成り。かく麻苦を受る事は。いとも憐むべき事あり。然れど釈魔の曲れる心。保持せざる。後學の心を添ふるを。今昔物語ある此僧に傳ふ。心直しと有る符ひて。殊勝なる事なり。

まゝ按ふに砂石集ふ。伊勢國の或山寺に。如法經行ひける僧の弟子に兒。佗地ともれく失せて見ざりける。一兩日過て堂の上にて見付くる。正念も如く見らる。暫して本心に成ぬ。さて語り傳ふ。山臥共誘きて。時の間小筑紫

の安樂寺といふ處の。山中へ行ぬ。老僧の八十餘ある。世に貴氣あり。其中に尊者と見し。何れ兒あり來よとて。傍に置いて。あ奴原を所詮なき者ぞ。此に居て物見よと云ふ。頼しく覺えて見る程に。山臥ども舞躍りくる。網に様ある物空より下りて。引廻き様に見ある時。山臥ども興覺て。北むとける。小葉を交。網の目より火然出て。次第に然上りて。山臥ども皆焼て炭灰ふありぬ。暫ありて又本の如く。山臥に成りて遊びらる。老僧あれ山臥是へ參まと呼て。いふ。和山臥よ。あの兒を具して來し。疾く本に山寺を具して行くと云きは。恐るる氣色ありて。具して歸ると覺る。

ると云りてと有也。此老僧れ殊勝に聞ゆるは。若くは是も
道昭ふは非ざりし。然らばを安樂寺を開基せし法師
ぞ有りり。年。

偕まゝ名聞利養の爲に。矯詐の説を構へ。我慢して。廣大の
希欲を發せるは。行基和尚を最速うてり。依。

其を四十九處に寺を建てるは。忘失菩提心。修諸善根。而て
魔業あり。大僧正の位を受け。四百人の出家を賜れるは。於
利養恭敬稱譽。心樂赴入。よて魔事あり。邪淫。犯して。孽子
を生給へる。光明皇后に菩薩式を授けたるは。得財利恭敬
供養。雖非法器。而強爲説。て魔業あり。殊に具足戒を受て

る身。て。畏くも伊勢大御神の託宣を偽作して神を誣ひ。
皇を誑惑せる大妄語を吐て。國家に道の大義を乱せり。尚
勝て計ぐ。魔事魔業を多かる。其は巫學談弊に記せ
るを見る。處し。

後に出る。最澄法師も。此に效いて。廣大に希欲ふ。比叡山を
物し。大伽藍を申し行ひ立て。天皇祖神の古傳を乱す。大妄説
を作て。彼山の本縁と成し。宇佐八幡宮。賀春神。諏訪神。あど
れ妄説。作て。是。魔業あり。

其に八幡宮。法華に法味を好給ふと託宣を偽て。賀春神を。
半身石の如き梵僧ある。此も法味を好めると云ひ。諏訪

神小も然る妄説を作れり。此事も委くを巫學談弊と云ふ。はく此僧の魔道小落カチりと覺ゆる事は。神社考小。慶長甲寅夏。叡山僧侶到駿府告衆曰。頃叡山有奇事。覺林房奴二郎者。一日忽失經數日。歸人問何之奴。曰。有人將我去到伯州大山。已而登筑紫彦山。於是大山彦山之山伏相共歸。時人々自愛宕鞍馬比良來會。有一僧自上野國來。座定鞍馬僧正曰。久無奇怪。東州西州合戰。今其不遠。愛宕太郎曰。如何。叡山次郎曰。東方必勝。其勢既見。言已各歸本山。我今見之。諸人不信。幙下聞而奇之。後果有大坂之軍。自古民之訛言時之童謠。史之所載。今亦奇哉。云れり。此叡山次郎と云ふ者を疑ふ。最澄法師の釈魔と為

まゆよとの稱ありと聞えり。

或人れ説り。次郎坊を云ふは。舊く叡山小住める天狗にて。最澄法師の靈小は非と云ふを信られぬ。抑皇國固より有る枉神と。僧徒の化れる釈魔とを考ふる小。同類の物も有れぬ。其所業は別な事あり。此次郎坊太郎坊が如き。其事跡を思ふ小。釈魔なる事疑ひなし。猶云はく此法師等より以前小。其名の聞えざゆを以ても知れし。

猶近く思ひ合さぬ事は。櫻町天皇の元文五年小。比叡山の西塔釈迦堂御修理有る小。奉行を江州信樂なる御代官。多羅尾四郎左衛門といふ人也。大津ある御代官。石原清左衛門

といふ人勤^{ツマ}られりる。石原ぬしの家頼^{ツマ}ふ。木内兵左衛門とて。三十餘歳の人^{ツマ}有し。三月七日に申時。ふと行方知れず成しうば。方^{ツマ}を尋ぬ。彼者^{ソノヒト}の履^{ハキ}に依下駄。行榮院といふ寺の玄関前と。内庭とよ片足^{ツマ}落^{オチ}てあり。奇^{アヤシ}み^{ツマ}に^{ツマ}見る。庭に角^{スミ}ある辨天の祠^{ヤシロ}に處^{ツマ}る。脇指^{サヤ}鞘^{ツマ}を碎^{タガ}りて。身は鐺^{タガ}鈎^{ツマ}の如く曲^{カマ}て。脇指^{ツマ}添^{ツマ}りる小刀は。三^{ツマ}折^{ツマ}て。其^{ツマ}辺^{ツマ}に下帶も三^{ツマ}折^{ツマ}きれて有けむ。人々天狗の業^{ワカ}と心得て。さ^{ツマ}かしこ尋ぬる。兔角見えざ。故^{ツマ}に山内^{ツマ}に寺^{ツマ}ありても。祈^{イリ}を始めて。慈慧大師廟を始め。魔所といふ所^{ツマ}に。人々を分て尋^{ツマ}り。慈慧僧正の名^{ツマ}に。良源や云ふ。世に元三大師と稱^{ツマ}はる。是^{ツマ}を

て。其廟を叡山の内^{ツマ}。横川^{ヨガハ}と云ふ處^{ツマ}に在^{ツマ}て。其^{ツマ}處^{ツマ}に今も大魔所と云ふ。猶^{ツマ}に僧の事は。次卷の始^{ツマ}に載^{ツマ}せり。

其夜丑刻前と覺^{オボ}し。頃^{ツマ}に。何處^{イツク}ともなく。大風の吹^{フク}おとく。大音^{オホ}に。頼^{タノ}ま^{ツマ}うと。呼^{ヨブ}聲^{コエ}き^{ツマ}あ^{ツマ}や。折^{ツマ}しも大雨ある。山をれを雪深く。物の何^{ツマ}やも見^{ツマ}え^{ツマ}ぬ。鈴木七郎と云^{ツマ}ふ人。彼聲を尋^{ツマ}ねて。釈迦堂に庭^{ニハ}に^{ツマ}出^{ツマ}て。見る。堂の箱棟^{ハコムネ}に^{ツマ}羽^ハ形^{カタ}あり。其形^{ツマ}の^{ツマ}も^{ツマ}に^{ツマ}立居^{ツマ}て。恐^{オソ}ろ^{ツマ}し^{ツマ}や下^{オホ}して。給^{ツマ}ち^{ツマ}れ^{ツマ}とい^{ツマ}ふ。七郎言^{コトバ}葉^{ツマ}に^{ツマ}加^{ツマ}けて。兵左衛門^{ツマ}あ^{ツマ}て^{ツマ}は^{ツマ}あ^{ツマ}き^{ツマ}やと問^トふ。ば。然^{オカ}也^{ナリ}や云^{ツマ}ふ。能^{ツマ}く見^{ツマ}る。小翅^{コササ}と見えし。破傘^{ヤブカサ}披^{ツマ}な^{ツマ}加^{ツマ}け^{ツマ}る。あ^{ツマ}に^{ツマ}か^{ツマ}くて人々よ^{ツマ}と集^{ツマ}り。四郎兵衛とい^{ツマ}ふ。働^{カタシキ}の者^{ツマ}棟^{ツマ}り^{ツマ}上^{ツマ}りて。迎^{ムカ}ひ^{ツマ}に^{ツマ}來^{ツマ}れ^{ツマ}と云^{ツマ}

予は兵左衛門タキチ忽タキチ小無性コムシヤウなり。持モチる傘カサを捨スツて。爰コ小四郎
兵衛ヘイも兵左衛門を背セねひ。帶オビひてく。腹ハラぢひ小形コガタめて下
りる。三日ミツのて本性ホンシヤウなり。後ノチ問ト予は。七時シツ覺オボし死
比ヒ何處ナニトコロとも形カタく名ナを呼ヨビりる也。外ソト小出コデる。玄關ゲンカンの前マエ。小
法師ホウシ一人。黒衣クロイ小短コミカきく。袴ハカマを著キて。兵左衛門とよぶ。彼
處コ小至コシれむ。又一人。顔カホ赤アカくて。黒髪クロカミ乱ミダし。引ヒキぎ衣イぢう。こ見
えて。裝束ソウソク著キし居イて。玄關ゲンカンの屋根ヤへ上ノボる。云イハへる故ユヘ。
主人シュジンある身ミあれむ。行ユキか。と。脇指ワキザシ小手コテを懸カケむとせし。彼
異人イジン也。も奪ウバひとて。投付ナゲツキる。其時サトキ。鞞サヤクダ碎クダけ。身ミを鎗ナベヅル鉤カのぶ
とくれむ。

今思イマオモふ。兵左衛門ヘイサエモンが。いひ分カマ甚シ理リある。天狗テンクの所レ為ワい。と
く不當フタタガヒあり。然カるは挂カケま。くも畏カシれ。天皇テンノウ小代コダイて奉ホウらして。天
下テンカの政セイはをし給タマフふ。征夷大將軍セイイダイサマれ。台命タイメイを蒙カシムりて。此ココ普請フシヤウ
の奉行フシヤウする人ヒト。其事コトあて仕ツカふ人ヒト。即スグ公武コウブ乃御用ノミヨウを勤ツメ
むる人ヒト。其帶オビひる兩刀リウタウ。やがて其士シの面目オモテする物モノれむ
は。人ヒト。私シれ物モノは。非ヒ也。然カるを天狗テンク慢マンる。それ魅術ハキヤクを以
て。斯カ依無道シイムダウのわざを為ナせ。凡スベふ世ヨれ帶刀オビタウを依徒イタ。その
帶刀オビタウある。所以ユエニれ本ホンを思オモひて。身ミの飾カザリ或ナラバ人ヒト恐オソしれど。れ
如カドく心得ココロエする。が多加タカ。能ノく其帶刀オビタウひる。所以ユエニを。知チて。帶
せむ。天狗界テンクカイと云イハへ。是コノ。天狗テンクれ。ち。國內クニノの幽界ユウカイ

あまは。天狗らいうで然る不當を働くはき。兵左衛門實體
者と云へど。此旨は知れどむ故。天狗のいる無道は
逢ふゆりむかし

下帶を取捨よと云ふ。此を免し給へと云ふ。是非小捨はし
せいふ。此哉やれむ。彼異人は杖小かくゆを見えし。忽ふ
三ッ切れと云。然して玄関は屋根へ引上て。此方の申分を背
く由云て。杖めて散く小打擲し。依時。長一丈計めと覺し
に高僧の紅衣著し。あるが來ふ。叱やう免て。何やらむ密語
くや見えし。其時を三四間も隔て見えける。六人ばう。正有
しと覺也。かくて異人。我と伴ひ行ふしと云ふ。背きては

悪うとあむと思ひ。差圖小從ひけれむ。是は乗べしとて。丸き
盆のおとき物を出せ。是は乗り。是は彼小法師。兵左衛門が
肩小兩手をかけ。下へ押おけられしと覺えり。其後地を
離れ。虚空へ高く上り。依。

この謂ゆる高僧も。即延曆寺に開山。傳教大師最澄と聞え
る。其由を下に評論小云ふを見て知るべし。まゝ丸盆の
如き物小乗せて。伴ひと云ふ。此を叡山天狗也。凡人
を乗躋せしむる術と聞えあり。神仙小種々の乗躋術ある
小準へて思ふは。叡山天狗小。かく依乗躋術あらむ。此も
疑ふはき。非也。

然らば秋葉山へ行^{ユク}きしと。虚空を飛行し。行方も知らず。海の上を通^トりける。餘^{ヨリ}に恐ろしく思ふ所^ヲ。彼高僧出て水不能漂と云へむ。恐るるうらゑと示せる故^ユ。眼^メを塞^{フサ}た通りけむ。海も其^ノ終^ハ見えし。さて秋葉山と覺^{オホ}えて。山上小至^{コシ}て見る。小十丈計り深^{フカ}き谷底^{タニツコ}に火炎上る。異人云^ヒるは。汝此谷へ飛^トげしと有^{アル}とも。此火炎の内^{ウチ}に落^{オチ}ち。焼^{ヤケ}死^シべしと恐^{オソ}惑^{マド}ふ折しも。高僧出て。火不能焼と云へむ。恐るるうらゑと示せ。眼をふさぎ飛^トりける。五六疊計りの平^{タラ}な所。岩の上小立^{タチ}止りぬ。此文小據^ヨりて攷^カめる。水不能漂。火不能焼とも。法華經の文^ヲにて。傳教の始めて立^タし。天台宗旨に要語あれむ。か

く教^{ツケ}りしと聞え。諸^サかくの如く。人^{ヒト}は恐るべき事を。強^{ヒキ}て爲^ナしめて。人の心を引見る。と。神仙も亦^ナ故事あるが。其は深き由^ユある事^{コト}なれば。天狗を殊^ヘにぞ。自^{タテ}に樂^{タカ}みと爲^シし事^{コト}。その例^タいと多^タう。

彼異人^{ヒト}を此所^コにて暫^{シブ}休み。まゝ妙義山。彦山。鹿嶋^{カシマ}あどへ行^イく。其外何國^{イック}ともれく。諸方見物致せしあり。此時兵左衛門思ふやうは。既^スに十日餘^{アサリヘ}経ぬらむと思ひ。何卒暇^{ナニトイフマタ}給れがしと云。婦兵左衛門が天狗小誘^{サツ}ちれる間^{アヒダ}に。一日一夜^{イツニチ}なり。大^{オホ}く幽界^{ユウカイ}小伴^{コトナリ}ちれる。多くの日數をも。志^シはしの間^マありと思ふ事^{コト}れる。十日餘を経^ヘしと思へる。甚^イふうし。此事

あり。仍て思ふ。神仙の幽界へ入るは。久し。九年月夜も
短しとし。妖魅は界を伴われ。暫時の間をも。長しと
思へるや。此を猶考ふ。し。

時ふ白髪の老人出来り。然らば金銀を出さ。し。と。大判小
判。一歩。小間銀。山も。ふ。臺。載せ。此金銀何程遣ひても。絶る
おとは無き由。て。給。時。貴僧の云。る。は。其金を受取ら
ば。其方二人。伯母の命。一年。縮。る。べし。と云ふ。兵左衛門
申さ。ハ。有。ぐ。と。く。は。候。へ。と。も。伯母。命。縮。ま。事。歎。は。し。け
し。は。断。て。申。度。と。云。る。

此白髪の老人も。貴僧の眷属。な。事。は。云。ふ。も。更。に。云。ふ。

人間。て。用。ふ。る。金銀。も。大。く。用。ひ。さ。事。と。聞。ゆ。る。ふ。此
天狗界。は。其。定。め。ら。れ。や。斯。う。多。く。此。金銀。を。與。へ。む
と云。し。と。是。ま。不。審。し。事。あり。り。

異人。又。云。ふ。其。方。奇。特。ある。者。に。然。ら。ば。一。生。安。穩。暮
に。様。な。る。秘。密。の。藥。法。行。法。を。傳。授。さ。し。其。藥。種。の。内。一。味。も。
當。山。よ。り。外。に。れ。し。調。合。の。節。登。山。致。さ。ば。必。是。を。授。く。べ。し。と
て。藥。法。書。付。給。と。し。ける。此。事。必。人。に。知。ら。れ。む。先。三。年
に。内。を。身。心。清。淨。し。て。別。て。女。の。不。淨。を。堅。く。慎。み。行。法。を。懈
怠。有。へ。ら。れ。三。年。過。て。後。に。妻。に。語。ら。し。有。る。は。苦。う。ら。む。然
し。藥。調。合。の。節。も。行。法。堅。く。守。る。べ。し。汝。正。直。な。故。に。是。を。傳

ふと示されり。諸其方をかく誡むる事は。摠ての人ども心
悪しく。山を麓末小致し。何一ま心入の諸人を見せ。免れ為
あり。歸る後。此趣に諸人子傳ふ。最や歸し申に。及し
とて。丑の刻なり。と覺し。此比。高山に峯小れろき。如く
覺し。本堂に棟あり。其後ハ彼異人。ち行方あら。に。
時小先。貴僧大音。て呼る聲。山河る。むく。ばう。と覺
えり。其時兵左衛門。かく吾を。に。救はせ給ふ御僧を。何
人。あて渡らせ給ふやと尋し。は。我を此山。九百年來住そ
やや云。なり。夫より。働の四郎兵衛と云者來て。某を捕へし
と覺ゆ。彼貴僧も行方知ら。吾も夢中。成ぬとぞ語。と

り。と其時の事ども。親しく見聞し者。の記し。比。巖山天
狗之沙汰。ち。書小見え。り。此を近頃。事れ。と。い。を正し
き筆記と所思る故。引出。す。

上。件の事ども。熟攷。する。彼のタノ。マウ。と。呼。する。は。
兵左衛門。小。は。非。謂。る。貴僧。呼。る。聲。あり。也。明。ふ
也。諸我。此山。九百年來住。と云。所。由。る。小。依。て。
此を疑。く。傳教。あり。とは。知られ。也。然。る。を。最澄法師の
寂。せる。は。嵯峨天皇。弘仁十三年。あて。元文五年。小。至。り。九
百十九年。あれ。其年數。い。能く。符。へ。其。は。佛法。出世間
の說。極樂往生の說。とも。小。其道。妄誕。み。て。其道。首張。せ

る。謂^{イハ}ある高僧祖師^{ソウシ}も。出世間も更^スある。往生^{オウシヤウ}に云ふ。
極樂世界の説も妄^{マダシ}ある故^ユ。死^シしての往方^{オウホウ}は。即^{スグニ}此世間の
幽界^{ユウカイ}にて。佛祖^{ブツゾ}さへふ。其靈^{タマ}の行方^{ユクヘ}は。常在靈鷲山^{リョウリョウサン}あれむ。泥^ニ
てその末派^{マツハ}に僧徒^{ソウド}を。其在世中^{セカイノナカニ}ふ。甚^{トク}く執^{シツ}せる山^{ヤマ}にふ常在^{ジョウゼイ}
して。天狗^{テング}と成りて在^{アリ}る事^{コト}較^{イナレ}著^{シテ}。然^{シカレバ}れを傳教^{デンキョウ}の巖山^{イハサン}に
常在^{ジョウゼイ}に在^{アリ}る事^{コト}云^{イハ}ふも更^スなり。諸^{カテ}是^{コト}より三年^{サンネン}まで。兵左衛門
其行^{ミヤウ}を乱^{ミダシ}し。茶屋女^{チャヤメ}と志^{ミダシ}る。ぐ。此事^{コト}ありて。非業^{ヒゲツ}に死^シを遂^{トゲ}
とめと云^{イハ}む。謂^{イハ}ある心中^{シヨウジュウ}に云^{イハ}はうれき死^シを為^{ナシ}とめと聞^キゆ。
哀^{アハレ}に兵左衛門^{ヘイサエモン}は。天狗^{テング}に在^{アリ}る妙法^{ミョウホウ}の傳^{デン}を受^{ウケ}ざらほしうは。
元^{ゲン}よその貧浪士^{ヒンリヤウシ}にて。其直情^{シツキョウ}正行^{セウキョウ}を。世^セのかぎに遂^{トゲ}げふり

むを中^{ナカ}に。妙法^{ミョウホウ}の傳^{デン}を受^{ウケ}て。欲^{ホリ}する。俟^{マテ}ふ。黄金^{オウゴン}を得^エる。む故^ユ
に。其行^{ミヤウ}を乱^{ミダシ}して。然^カる非業^{ヒゲツ}の死^シを。は遂^{トゲ}するあり。抑^{オモシ}始^シ免^メ
兵左衛門^{ヘイサエモン}哉。天狗^{テング}に誘^{サッ}ひ出^デせる事^{コト}を。元^{ゲン}來^{ライ}兵左衛門^{ヘイサエモン}に。過失^{カシ}
ある故^ユに。非^ヒに。餘人^{ヨロヒト}らに。不當^{フタウ}に行^{ユク}ひある哉。諫^{イサカ}めざるが
憎^{ミナクシ}しとて。誘^{サッ}ひ出^デして。打擲^{ウチシツ}せ給^{タマフ}。不當^{フタウ}あるを更^スふも云^{イハ}は
ふ。彼高僧^{タカソウ}の叱^{シカ}ふ。其過^{アヤマ}ちを悔^{クハ}する趣^{オモシ}めて。後^{ノチ}に兵左衛門^{ヘイサエモン}
が心を慰^{ナグサ}めむとよや。伴^{トモナ}ひて。諸國^{シヨクニツク}の名山^{ミナヤマ}とも見^ミせめ給^{タマフ}れ
給^{タマフ}。猶^{ナホ}氣^キに毒^{ドク}うや思^{オモ}ひにむ。呪文^{ジュモン}をも教^{ヲシ}へ。まゝ用^{モチ}ふる時^{トキ}
を。伯母^{ハクバ}の命^{イノチ}を縮^{チヂム}むべき。金銀^{キンギン}を與^ユふむとし。其^{ソノ}をも辞^{イハ}めむ。
終^{ツヒ}うは身^ミに非業^{ヒゲツ}小亡^{ホロ}なり。基縁^{キエン}とある藥法^{ヤクホウ}に與^ユへて。盛

壯の男子。不淫戒を三年禁し。それを禁じ敢て。然る
非業。小死しめしめ。は。何小天狗の枉ら。邪ら。や。れ。此
事委くは。本書小就て見る。〇ま。沙石集を見む。洛
陽。或女。靈病。何りれむ。種く小祈りれども。有驗の者を
も欺き笑けむ。力及ばで打捨り。彼が云く。佛法は。眞實
の道心。何て。生死を離れ。悟を開く事ある。何小學し
行。れども。名利執著の心。何りて。實の菩提心。形りれ。魔
道を出。我を一代に聖教。一も不審なく知れ。然る小道
心れく。今小出離せ。僅小紙一重隔りて。覺也。依あり。
我を天台山の立始。し時の者ありと語る。さて當世の智

者と聞ゆる人の事を問へ。皆云。甲斐なく云へ。と有り。
是も彼。最澄法師に靈と聞え。と。

次小空海僧都。あれも行基。最澄が妄説。小效ひ。廣太の希欲。よ
高野山を竊して。其山の神を誣る。妄語せ。依る魔事。ある。小
樂學。世論。巧述。文詞。諸佛を讚。摩訶毘盧舍那。とい。佛
語。小。天竺。を更あり。漢籍。小。曾て見えざる。大日佛。云。小。佛
名。を偽作し。翻て。摩訶毘盧遮那經。を。大日經。と譯し。其本縁。よ
畏くも。天照大御神。を。己が偽名。の大日佛。を。人の思ひ。紛ふ。虚
き幻説。を。巧み出し。

此事も巫學談弊と。印度藏志と。小委く論へ。中。小。も。嵯峨

天皇の書せ給へる。金字心經の奥に書し。記す。詣神舎輩
奉誦此秘鍵。昔予陪鷲峰說法之筵。親聞此深文。豈不達其儀
と書るれど。餘亦妄語あり。

殊小名聞利養の爲に。魔事妄言は更にも言はま。我慢勝他の
惡念深く。修圓法師を呪殺し。

今昔物語集に。嵯峨天皇の御代に。弘法大師僧都に位ありて。
天皇の護持僧ありき。はる山階寺の修圓僧都といふ人も。
護持僧ありて。共に候ひけり。此二人は僧都共り。止事あり人
りて。天皇分ち思召に事無りり。然るに修圓僧都。天皇の
御前より候ふ間。大なる生栗あり。天皇此を煮しめて。持參れ

と仰せ給へば。人取て行くを見て。僧都云く。人間に火をも
て煮ばとも。法力をもて煮候ひあむと云ふ。天皇聞給ひて。
極め貴に事あり。速に煮給しとて。塗る物の蓋に栗を
入きて。僧都の前より置け。僧都然まは。試み煮候はむとて。加
持けるに。甚吉く煮られぬ。天皇此を御覽じて。限れく貴
ひて。即ち聞召に。其味は他より異なり。かく爲るを度く小
成ぬ。其後大師參り給ふ。天皇此事を語らせ給へむ。大師
聞て申し給ふ。此事實に貴し。而るに己候む時。彼を
煮しめ給ふべし。隠れて試候むと隠れ居ぬ。さうして僧都
を召て。例の如く栗を煮しめ給ふは。僧都前より置て。加持を

依り此度は煮られぬ。僧都力を出して返く加持いと云へども。前の如く煮られぬ事なし。其時小僧都奇異此思を成て。此を何ある事ぞと思ふ程。大師喬より出ると。僧都此を見て。此を此人の押すける也と知て。嫉妬の心忽ち發りて立ぬ。其後は二人此僧都極めて中惡く成て。互に死ねと呪咀しり。其時小大師謀を成て。弟子ども城市に遣りて。葬送の物此具共を買し。空海僧都も早く失給すれぬ。葬送此具を買ふありと。教へて云しむ。修圓僧都の弟子是を聞て。喜びて走て行て。師の僧都此由を告ぐ。僧都此を聞て。慥に聞けやと問ふ。弟子慥に承りて告申に

あてと答ふ。僧都され他ふ非也。我が呪咀しける祈の叶ぬ所也と思ひて。其祈の法を結願し。其時大師人をもて。竊小修圓僧都此許。其祈の法此結願し。其時と問しむ。今朝結願しぬる由哉いふ。其時大師切て小切りて。其祈此法を行ひられぬ。修圓僧都俄に失り。大師其後を心安くあむ思はむ。此有。此事古書ども彼此に見え。何れも守敏僧都を。修圓とあるは。今昔物語集のみなり。按ふに。一は号ふそ有り。法師は然る倫いと多り。此二人の僧都此わざ。共小幻術ある事を云ふも更ある。空海僧都も。小幻術の力に勝る。依り

そ有ける。惑ふ處うらに。

死後もれを邪執を留めて。在世中れ妄説を示せる。摠て魔道の所爲あり。

然るは古事談ふ。六波羅の大政入道。安藝國司の所時。重佛此功小。高野の大塔を造られり。材木を手拾うら持たり。其時香染を著る僧出來て云く。日本國に大日如來は。伊勢大神宮と。安藝の嚴嶋あり。大神宮を何まて幽玄れ。汝もまゝ國司せり。早く嚴嶋に奉仕さべしと云ふ。守まを奇み。貴房をは誰と申は。問はば。奥院の阿闍利と申は。申はと云て。搔消やうみ失うけ。此僧をば國

司の外。餘人此を見えと。何ま。奥院へ詣り。時。大師御戸を開き袖を差出させ給ふ。此に依て五箇所を寄進せられ。と云事も見え。清盛も此故あり。弘法は深く信じ。已て通えて。源義平の靈に雷鳴して崇めり。弘法眞筆に心經を守り懸けし。戒の餘り。頭は挂あがら。打振く。あゝと。平治物語小見え。死後もかく我執小。在世中の妄説を云へり。大神宮は更あり。嚴嶋神も豈大日れらむや。あゝ諸書小。空海勅字受て。朱雀門の額を書け。後小野道風朝臣其額を見て。朱雀門を朱雀門と。略頌小作。程り。やがて中風して手あがり。手跡も

異やうふ成りけと記して。後人の甚く恐る由見ゆと。
是も實あらば。我執あらばらえや。俗人を然も有るむ。
豈あれ出家に本意れらむや。出家といふは三種ありて。一
小親を辞して世俗の家を出。二うは道を悟て五蘊家を出。
三よは果を證して三界の家を出と云ふ。れど此現世
の事小執を残して。纔小此境をさすふ出さぬる年。

次う圓仁法師を。其師最澄が志成受て。妄説弘免て。首楞嚴
院を建立し。法華經を書し。依時小。住吉神現れ。彼經を守護
まゝと宣へたと云ひ。まゝ諸神替るぐ。彼經を守護せむと。誓
牙依由を詐て。三十番神といふ事を妄作し立る。是名聞

我慢の魔業あり。

其を古今著聞集小。慈覺大師如法經書る時。白髪のお翁
杖小携がりて。山より上り。何れ苦し。内裡に守護
と云ひ。如法經の守護といひ。年々高く成て。苦く候と宣
ひり。誰う御渡り候ぞと尋ぬれむ。住吉神ありと名告
けると見え。今昔物語集小。慈覺大師は。傳教大師の入室寫
瓶の弟子也とて。比叡山に受傳へ。佛法興隆に志し。殊小深
し。而れを別小首楞嚴院を建立し。中堂を立て。觀音不動毘
沙門を安置し。摠持院を起て。宋より將來の舍利を藏めて。
舍利會を行ひ。常行堂を建て。不斷念佛を修む。是阿弥陀佛

を讃^{コエ}はる音あり。引聲と云ふ是あり。あゝ山小大^キなる相^{スギノキ}木有^レ。其木の空^{ウツロ}小住して。如法に精心して法華經を書^カれける。書^{カキテ}畢て此經を安置^レ。如法經此よ^レ。始^ハま流^ル。其時小此朝^{アサ}此^{モロ}諸^{ヤムゴト}の止事^{ヤムゴト}れき神。み^{チカ}る誓^{カキ}を起^カし番^{ムス}を結^{ムス}びて。此經を守り奉^{ホウ}らむと。誓^{カキ}へ^レと有り。諸神のかく誓^{カキ}ひ給^{タマフ}ふりと云^フこ^ト也。元^{モト}此法師の言^{コト}出^{イデ}ばを誰^{タレ}う知^チらむ。釈書^{シヤクショ}に。此時書^{カキテ}る經を。小塔^{コトウ}に藏^{カケル}えて。一菴^{イツアン}小^コねく。如法堂と名^ナづく。今の首楞嚴院あり。法華經を如法經と云^フこ^ト也。是よ^レ。始^ハまる由云^フへり。まゝ引聲の事も。古事談^{コトワタ}ふ。慈覺大師も。音聲不足^{オンセイブツ}ありしうば。尺八を以て。引聲の阿弥陀經を吹^{フカ}れり^ト。成就^{シュウジツ}如是功至^ニ。

莊嚴といふ處を吹^{フキエ}得^エざ^レり^ル。常行堂の辰巳^{マツビサレ}此松扉^{マツヒ}ありて。吹^{フキ}あ^ハり^ルひ^リ依^{ヨル}る。空中小聲^{コノコエ}ありて。や音を加^カふよと云^フへ^レ。是よ^レ。如是^ニやと。や音^{オン}加^カへ^ルゆ^ニと有^レ。功德^{コトク}を聲^{オン}の善惡^{オン}小^コ依^{ヨル}ま^ルじ^ル物^{モノ}をや。

其建^{タテ}る院の名^ナに負^{オス}ふ。首楞嚴經^{スレンガンキョウ}小^コも。定中^{テイチュウ}見^ミ色陰^{シキオン}銷^{シユウ}受^{ジュウ}陰^{オン}明^{メイ}白^{ハク}。自^ミ謂^{イハ}已^ニ足^{トク}。忽^{トキ}有^リ我^ガ慢^{マン}起^キ疑^ギ誤^ゴ衆^{シュウ}生^{セイ}。此則^{コノスベテ}有^リ大^{ダイ}我^ガ慢^{マン}魔^マ入^ニ其^{ソノ}心^{シン}腑^フと^リ。相^{サウ}室^{ムロ}此定中^{テイチュウ}小^コ。己^ミる自^ミ足^{トク}れ^ルと謂^{イハ}へ^ル我^ガ慢^{マン}心^{シン}あり。衆生^{シュウセイ}を疑^ギ誤^ゴせる。妄^{マカ}説^{セツ}を吐^{ハキ}く^レと^リむ。

諸神の法華經^{ホフワキョウ}を守護^{シュゴ}せむと宣^{ノリ}へりや云^フふ妄^{マカ}説^{セツ}を。有^ルが中^{ナカ}小^コ最^{サイ}憎^{ニク}き言^{コト}あり。れ^ハ不^フ巫^ニ學^{ガク}談^{ワタ}弊^{ヘイ}小^コ言^{コト}ふ我^ガ見^ミる^ル法^{ホフ}し。

次小智證とは。圓珍法師が事あり。此を祖業を受て。比叡山を
持モチふ。猶喜足を知らず。別ワカる我が門徒を立むと。三井寺を
再興して。三尾神を誣コトひて。佛法を守る神とし。

其は今昔物語。元亨釈書。古今著聞集あやふ。智證大師我が
門徒を。別小立てむと思ふ心有て。我が門徒の佛法を傳置
けき所り有る也。所く求めて。新羅明神と共る。近江國志
賀へ行給ふ。昔大友皇子に立たる寺あり。寺辺は荒アサる。依
一房あり。年老トシヤイる僧一人居あり。其名を教待といふ。見れ
む。鮒フナの鱗骨ウロコホネあと。残食散クヒチラして。臭クサこと限カるし。僧の躰を見る
小。貴タカく見ゆれむ。定サめて様有らむと思ひて。語らふ。老僧

云く。我此處に住て。百六十年を経ヘり。此寺を弥勒の出世
はで持タモツけき寺あれども。持べき人無ナき。幸サイに師に來
て給へむ。永く讓ユカて奉るやいふ。新羅明神は。寺に北野小止ト
まり。無量の眷属圍繞ウイロウせられども。他人を此を知らず。其時
興コ小乗コリる。人百千に眷属を引率して來て向ひ。明神を飲
食を奉て饗アハして。大師を告ツケて云く。我は此寺の佛法を守ら
むと誓チカへる神なり。今聖人此寺を傳ツタへ得て。佛法を弘ヒロめ給
ふ。後ノチは。今よと深く大師を憑タまむと。老僧と共る。明神
の處に至タる。互タガヒに喜悅キエツす。然る小老僧と興コ小乗コリる人。忽タ
小見え。明神を誰人タレトみて御ミにと問ふ。老僧を是弥勒如

來。佛法を護持せむ爲。此寺に住給ふ。輿に乗る人。三尾明神に御託と答へ給ふ。然れども只一人は非々と見おろして。老僧の房に至れども。始は梟とある。此度を極えて馥し。前小鮒に鱗骨と見おろす。蓮花莖根葉を煮食いする也。其後諸弟子を引具して。此寺に佛法弘免て今ふ盛なり。三井寺と云ふ。天智天武持統三代の天皇に生じ給へる時。産湯の水を汲み。井の有き。御井寺と云し。を大師改めて三井寺といふ。弥勒三會に曉を繼しむる故あり。圍城寺と云ふは是ありと云へ。新羅明神と云ふ。前小渡唐しある。歸る。新羅國より伴ひ來れる。蕃

神あれ。佛法の守護も然も有。弥勒井の出現せりと云ふも。實には有名無實に物あれ。釈魔に出現はる。珍のら。然も有り。唯三尾神の出現して。佛法を守らむと誓へ。と云ふ事は。例の妄語あり。若實に出現せられは。其まゝ釈魔の出現あるを。誠に弥勒眞の三尾神と欺か。とありて。此より菩提心忘失して善根を修し。名聞れ。爲。己。門徒を別立てむと思へる。我慢心よりぞ起り。此僧に勝他の名聞心より。三井寺に立て。其一派を遺せる。故。慈覺に徒。智證の徒と。天台二派に別れて。其徒の互。我慢勝他乃邪見を發して和合せ。世を驛

乱せし天皇をも蔑如し奉ずる事。次く記を見えて知る
べし。後より此僧の諡号此事を僉議何とせしと。主上の御夢
小。別名求らるるうらぶ。大通智勝れとまば。智證と付べ
た也。誨サト白ハクせるよし。古事談三卷あど小見するも。既小
天狗と成しかむなり。

是より後の法師とも上カミあ依四大師の妄説を根基とて。弥
次ツギく小。神を佛法より引率ヒキイする。妄説を吐散ハキナせる事は。今盡く記
し。遑イト何らぞ。取總トリスミて言はる。本地垂迹れ説を。行基并ナリ其種
を殖ウヰ初ハジメある哉。四大師の其ソノ枝繁茂せし。弘通せるなり。實小
皇神の道は。大妖魔小非ヒや。是を以て神社考小。沙門之有慢

心者。多入ル天狗之中。傳教弘法慈覺智證等是也。とは言れりむ。
然れを神道小志有らむ人。此を能く辨ワカへば。有ルるら
ま。神社考小。夫本朝者神國也。中世佛氏移彼西天之法。變ハ吾
東域之俗。神道漸廢。而以其異端離我而難立。故設左道之説。
曰。其本地佛而垂迹神也。時之王公大人信伏不悟。遂至令神
社佛寺混雜而不疑。巫祝沙門同住而共居。嗚呼神在而如亡。
神如為神其奈何哉。讀書知理之人可少覺也。非為庸人而モ言
之。と言れしを孰思ふヨク。四大師已小右の如く。魔事魔業
を脱ノゲせざば。其門葉末派の法師とち魔道小墮オチざるは一
人も有アルはハく覺也。

形を神社考ふ。尊意與群鳥同翔於横川之杉。

澄圓僧が志評論ふ。釈書の尊意傳を引て。釈尊意姓丹生氏。十七落髮修練之後任延曆寺座主。天慶三年二月二十四日逝年七十五。瞑目之後。鳥百餘集房悲鳴見人不避移時飛去。蓋生平分食施鳥以木叩板群鳥飛來矣。若因是為群鳥哉。分食施鳥最沙門檀施也。何得群鳥之業哉と云へれど。羅山先生の意は。尊意を鳥の業を得るや。その事小は非ず。群鳥と共に横川に杉に翔ると云ふは。正しく古書に其靈の群鳥と共に天狗と化りて翔ると。故事の有らむを見て記されらむを。釈書小は其事を隠して。只小鳥に集れる事此

みま記して。其やうて徳行を感慕して。集へる事小執成と依物あるべし。予は未先生の見られし書を見らむとも。尊意を後小。妙義權現と崇めたる。其縁起を見れむ。古より釈子の魔道は墮する倫いや多う依を。我いつて其魔道は入て。其倫を降伏して。正道に赴けむと誓ひて其黨に入る由見えたる。是極めて古に據有べりれむ。羅山先生は其哉見て言れしれらむ。

慈惠著甲冑攻三井寺燒千手院。

元亨釈書を始め。諸書を考ふる小。圓融院天皇の御世。天元四年十二月。餘慶法師哉。法性寺の座主小補せら依。此を智

證れ徒あり爰に慈覺の徒奏云く。貞信公始て。法性寺を
建て。辨日法師を座主と任ぜし以來。九代相繼て。慈覺の門
才と小當る。然るに今第十代に。智證の門人をえて加すは。
慈覺の徒望を失ふべしといふ。敕答に檀家小告よと宣へ
は。慈覺の徒百六十人。檀家関白頼忠公乃家に向て喧ぎ訴
す。あむく。爭論あり。帝聞食して。法性寺に座主始て慈
覺の門小附り。智行兼備の者を撰ひて任する。適く
慈覺の門より人多かりし故に。相次て此を領せ。今餘慶ま
と智行の譽ありて任ず。何ぞ必しも。慈覺の門を守らむ
や。況や喧爭徳を敗り。僧侶の事非ずと怒坐して。百六十

人の封職を息む。茲より兩門和せ。拒争ひ日小滋し。智證
の徒叡山出て別院小居し。餘慶も門人を率ゐて。觀音院
小住す。その徒弟勝算。觀修。穆算あど百餘人。れや山上千手
院に在り。此時慈惠僧正良源も。天台座主めて。元より是慈
覺の徒あり。密に謀て。衆徒をえて千手院を焼しめむ
と。此事朝小聞えしうは。敕を下して云く。良源千手院を
焼て。餘慶穆算等を殺さむと欲する陰謀匿し難し。早く其
機を止免よと。良源表上して陳す。是より後。一條院。天皇
の永祚元年九月。餘慶僧正を。延曆寺の座主と補せらる。慈
覺の徒奏して云く。智證の門徒座主小補せられむ。講堂を

開^{ヒラ}べゐらばと。帝^{ミカド}を更^スあて。時の関白兼家公も。はと過^ヒ訟^{ソウ}を
思^{オモ}食^シりて。同帝^{ドウテイ}の正暦四年。觀音院成算の徒。叡山衆と卻^ヒあ
て。慈覺の徒。千手院を燒^ヤき。房舍を壞^ヤること四十餘宇あり。
兩門相爭^{アラ}ふ。慈覺の徒。智證の徒。一千人を擯^ヒりて。山を出せ
りといへ。此時良源死^スして。既^スに九年の後あれど。彼天元四
年の。存生ありし時。千手院を燒むと陰謀^{インボウ}し。起^タる。故^コに救^スふ
依^ヨて止^トまれ。ちうど。其宿執勝佗^{シュツシツト}は惡念^{アクネン}れを止^ヤめて。此時
其靈^{タミ}れ現^{アラ}ちて。徒^ニに千手院を燒^ヤしめ^スる事^{コト}れ。古書^{コショ}に有^{アル}
しを見て言^イれし成^ナべし。今昔物語集^{イマセキモノガタリ}に。良源僧正成靈^テ來^キ觀^{カン}
音院^{オンイン}。伏^フ餘慶僧正^{ヨウキョウモウジ}語^{コト}といふ條^{ジョウ}あり。今本^{イマホン}に本文^{ホンモン}を關^カとせど。

前後^{ゼンゴ}に天狗の事を記せる間^マに。此題号^{コトナ}の條^{ジョウ}を思^{オモ}ふ。此を
決^キめて天元四年に一件^{イツペン}の宿執^{シュツシツ}に依^ヨりて來^キたる事^{コト}と覺^{オホ}也。
羅山先生^{ラサンシヤウ}も。此條^{コトナ}の關^カさ。原本^{ホンペン}を見て言^イれしあらむ。猶^ナ下^ゲに
記^キに祇園^{ギエン}を。天台^{テウタイ}に末寺^{マツテ}とせる一條^{イツジョウ}を見ても。良源の宿執^{シュツシツ}
深^{フカ}き事は炳^{イナ}焉^ニし。ちて此後^{コノノチ}をばま^マく執^{シツ}を引^ヒて。比叡山^{ヒエツサン}と
三井寺^{サンメイジ}と和^ワせ。ち。動^{ユル}もは。鬭爭^{コウソウ}を發^{ハツ}して世^セに躁^{ソウ}かし。宸^{チン}
襟^{キン}をもれや免^メ奉^{ホウ}て。三井寺^{サンメイジ}を燒^ヤくる事^{コト}も數^{カズ}く有^{アル}し中^{ナカ}に。古
事談^{コトワタシ}に。永保元年^{エイホウノトシ}六月九日。叡山^{エツサン}の僧徒^{ソウテ}れ為^ナる。三井寺^{サンメイジ}燒^ヤる。
其^{ソノ}日記^{ニチギ}云^{イフ}。御影^{ミカゲ}十五所。堂院^{ドウイン}七十九所。塔^タ三基。鐘樓^{ショウロウ}六所。經藏^{キヤウザウ}
十五所。神社^{シンジャ}四所。僧坊^{ソウボウ}六百廿一所。舍屋^{セウ}一千四百九十三宇。

廣考天竺震旦本朝佛法興廢未有如此破壞智證大師入滅以後歷百九十一年有此災云々と有り。互タビ小天狗とありて此争アラソひ也。うし。あと同書ふ。西京の良眞僧正此也。三井寺を焼くところあが。僧房ガカリ許を焼て。衆徒等帰山しふところまば。座主これを聞て。堂舎經藏焼くらはあそ甲斐カヒあらめ。僧房許を詮シふき事也と云ふれむ。翌日はと發向して。金堂より始め。堂宇經藏みな焼拂けるとも見也。代々の座主此我慢勝マノカミ他此執深き也。是コノもて知へし。まゝ此コノ可笑き事なり。此も同書ふ。保安二年閏五月三日。圍城寺焼失のよし。或寺の僧此夢想カチムカスリふ。褐冠キを著る人あり。誰人タレヒト小御坐オシマに

と問へむ答云く。我を新羅明神の眷屬あり。此寺を守護せむ為小經廻コトヘケラまといふ。夢中ユメナカ小嘲アザカりて云く。佛像經論堂舎僧房コトヘ悉く灰燼コトヘもあり畢ハルぬ。何物を守護せらるべきや。無益の守護オホクりと各ユキワカ行分ユキワカあつ後ナホシまゝ直衣ナホシを著るキ者トシヨリ老れ人出タビ來る。容タビ身タビを見る小直人タビ非タビ也。其眉メ長タビく垂タビして口小及タビひ。鬢コトヘ髮コトヘ皓白コトヘあり。件人云く。汝コトヘが言太コトヘ以て子細コトヘな知らば。本よ此寺城守護の素意タビさうは堂舎僧房を護らタビぬ。唯タビ出離生死の志を守護タビま。如此カクき患難カクのと也。僧徒多く道心を發し修學小倦タビに。我此人を守る也と云へ。此事圍城寺の別當大僧都覺基の語申し所ありと有り。此を覺基が餘タビり小度タビ

度其寺の焼れぬ。新羅明神が守護神とて在るが。云ふ甲斐れき事哉思ひて。造言せらる。えしも此夢誠れらば。彼僧は難詰ふが。さう負惜みの妄言せらるの二枚を出さ。いうをかし。事あらや。

覺鑊得造作魔心。營傳法院。高野衆徒忿而鼓譟。攻鑊居。不見鑊而見不動。衆徒曰。是必鑊也。飛石中不動。時血流。衆徒曰。非不動。是覺鑊也。其後多武峯方等法師狂言曰。吾是覺鑊也。怒目睨人。取火箸燒爐中。手自弄之曰。我始作卽身成佛之印。是兩部祕奥之印明也。

元亨釈書を始に諸書を考ふる。覺鑊を肥前國人にて平

氏なり。此に記されし事は。多武峯小方等法師といふ者なり。數月狂疾差に。安部山の慶圓法師と云を迎へて加持せしむ。慶圓その房に入れむ。方等目怒して慶圓を睨み。火箸を取て。爐中にて焼く。手小弄ふ。慶圓軟語慰誘して菩薩戒を授く。方等微笑して云く。我火箸を焼く。師の心を試みむと欲してなり。然るに今師の誦戒を聞て。我心已小降。慶圓云く。公も誰あるぞ。方等云く。我も覺鑊あり。此方等我を誣て。卽身成佛の印言は。覺鑊始に作れりと。殊に知らぬ。彼印言は三圓相承に。兩部祕奥の印明あり。我只此の事哉言むと欲して。屢く方等よ託せ。乃に慶圓云く。

幸甚あり。今名徳小逢^アひて未聞^{キク}を聞^キことを得^エとありと。請談
良久^{ヤヒサ}しく。方等^{ヤヒ}が病^{ヤヒ}をれちち瘡^{イヘ}ありと有り。羅山先生^イの
事^{コト}を言^{イハ}れしなり。

又和州^{ワシュ}堯信^{ヤウシン}爲^テ天狗^{テンコ}言^{イハ}而告^テ慶圓^{ケイエン}曰^{イハ}。吾^ハ是中院僧都也。浮屠巫祝
豈能降^{サス}我^ワ哉。我心^ニ慢罵^{マンマ}之^レ。揮^ヒ斤^{キン}之^レ。我徒^カ有神力者三百餘類。伺^ヒ人
死^シ作^ス燒害^{ヤウガイ}。自古^{コノミナト}高僧碩師。臨終^{リンシュウ}多^ニ遭^フ魔^マ撓^ニ皆^ニ我之所爲也。と有^リ。
此事も元亨釈書^{ゲンケイシャクショ}小。大和國^{ダイワクニ}に堯信^{ヤウシン}と云^フ者^ノあり。狂疾^{キヤウシツ}を受^ケく。
加持^{カチ}する者^ノあり。慢罵^{マンマ}揮^ヒ斤^{キン}。其父安部山^{アベヤマ}の慶圓^{ケイエン}を屈^ク
て救^スひを乞^コふ。慶圓^{ケイエン}彼^{カニ}小^{イタ}到^{イタ}れ。堯信^{ヤウシン}恭敬^{ウヤク}志^シく礼^レを作^ナして
曰^{イハ}く。此^{コノ}ごろ陋^{ロウ}し比丘^{ヒク}。賤^{イハ}しき巫覡^{ウケキ}ら。聲^{コエ}を厲^{ハゲ}く。あて呼號^{コウガウ}

する故^{ユヘ}う我^レ慢罵^{マンマ}をれ。今高德^{コトク}小^ア値^チふま^ニ幸^{サイヒ}あり。願^{ネガ}はく
は左右^{サマ}を退^{ヒラ}けよ。我^ガ夙志^{ソクシ}を通^スぜむ。慶圓^{ケイエン}をれちち看病^{カンビョウ}の
者^サを去^サる。堯信^{ヤウシン}云^{イハ}く。我先世^{サキノヨ}に灌頂^{カンテイ}を欲^{ホシ}して。遂^{トゲ}に亡^{ナシ}き。
餘^{ヨリ}執^{ツキ}竭^{ケツ}生^ナを鬼趣^{キソ}小^{ウケ}受^{ウケ}と。而^{シカ}れども法力^{ハクリキ}に感^{カン}ずる所^{トコロ}を
神威^{カミイ}あり。願^{ネガ}えくは悲救^{ヒキウ}を垂^タして。密灌^{ミツカン}を授^{サツ}與^ユせよ。慶圓^{ケイエン}
云^{イハ}く公^{キミ}を何人^{ナニヒト}ぞ。堯信^{ヤウシン}憮然^{ボゼン}とあて恥^{ハッ}る色^{イロ}あり。慶圓^{ケイエン}いれ
己^ミ小^{スデ}授^コ與^ユを乞^コふ。豈^{アニナ}名^ナを忌^{イマ}むや。堯信^{ヤウシン}良久^{ヤヒサ}しれあて云^{イハ}く。
我^ハは中院僧都^{ニョウインソウド}某^{ナニ}あり。慶圓^{ケイエン}をれちち灌頂^{カンテイ}を授^{サツ}く。堯信^{ヤウシン}歡喜^{カンギ}
合掌^{ガッショウ}して云^{イハ}く。宿望^{スツボウ}已^{スデ}小^タ足^タまり。久^コく此^{コノ}う居^{イル}るうらに。何^{ナニ}
を以^モて此^{コノ}恩^{オン}を酬^ウいむ。慶圓^{ケイエン}云^{イハ}く。我^{ワレ}世^{ヨゴ}に已^{スデ}小^{ツキ}灰^{ハイ}める餘^{ヨリ}を。何^{ナニ}

成^シ言^ハむ。而^レれども此^コハ一^ツ所^ニ也。古^{ヨリ}碩師宿德。臨終^ニハ
魔^マ撓^ヲ小^コ遭^フ者多^シ。神威^ニあらは意^コせよ。堯信^ニいはく。我^ガ徒神
力^ノの者三百餘人あり。人^ハれ死^ニを伺^タひて燒害^ヲを作^スに。已^レれ誠^ニ
免^ハは敢^テて為^サらむと。言^ハ已^マる。疾^ヤハあはち愈^ユらりと有^リ也。
中院僧都某^モあゆむ。名^ヲを憚^ハりて記^カさるゐる。十訓抄十卷
小。遍昭^トと云ふ也。左馬頭顯定^ノの子也。中院僧正^ヲいふと
有^リ也。此^ノ人^ヲや猶^{ナホ}攷^カふべし。